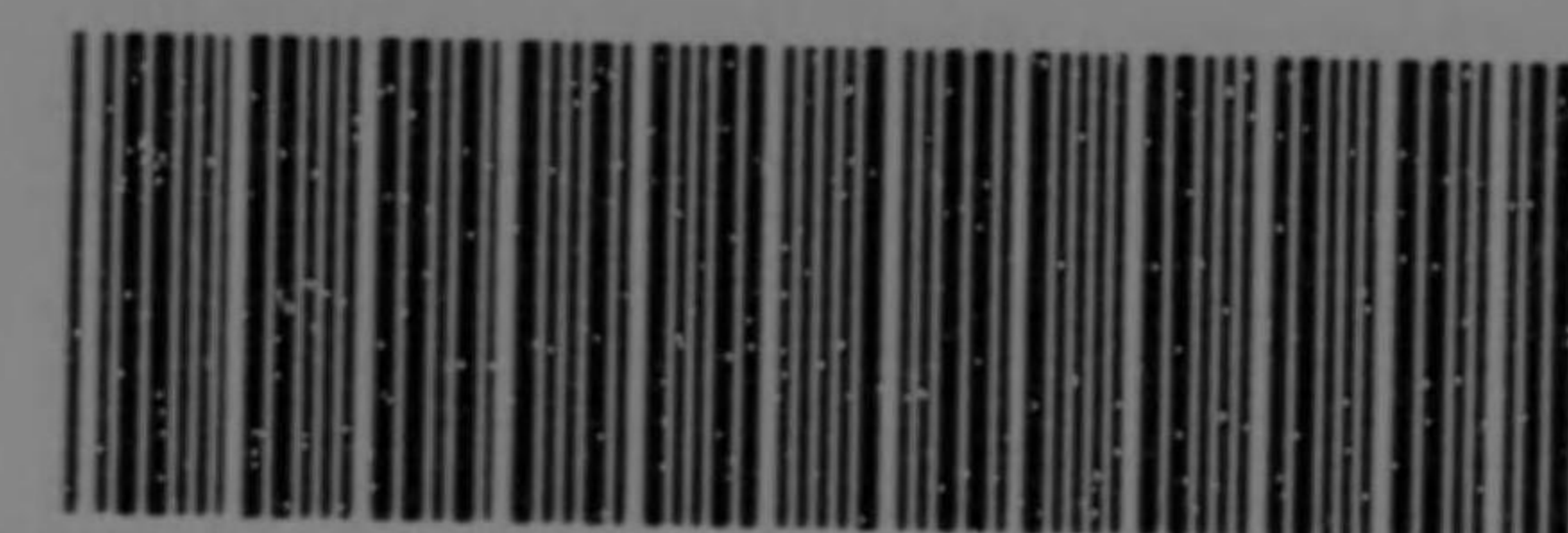


思想国防の神髓

390.4
Ta 84



* 0 0 5 5 3 2 5 0 0 0 *

0055325-000

390.4-Ta84ウ

思想国防の神髓

田中智学・著

天業民報社

昭和17

AJA



737

390.4

7184

2



田中智學講述

思想國防の神髓

天業民報社發行



943
107

序

劍も飴の如く、敵も吾が兒の如く、逆即是順の教意、怨親平等の慈眼、一視同仁の恩、王者無外の化。
内に融妙の文治あつて、外に秩序の武備を有し、心に同情の血があつて、眼に甘露の涙がある。

と、夙に著者先生は文武一體の妙道神髓を記されてゐる。本書に輯めたる六篇も亦これ先生が、無邊の天地に流された甘露の涙の瀝りであり、思想國防の神髓を詳述、講論せられたるものである。

時局下その甘露の一滴を一億同胞の胸に頒ち贈りて、高度國防國家建設の基本信念たらしめたいと念ふ。願はくは大方の諸賢、本社歌々の徴志に御協和、御聲援あらんことを。

詞

次目・隨神の防國想思

武 育 論……………(一)

軍人教育の中心點……………(五)

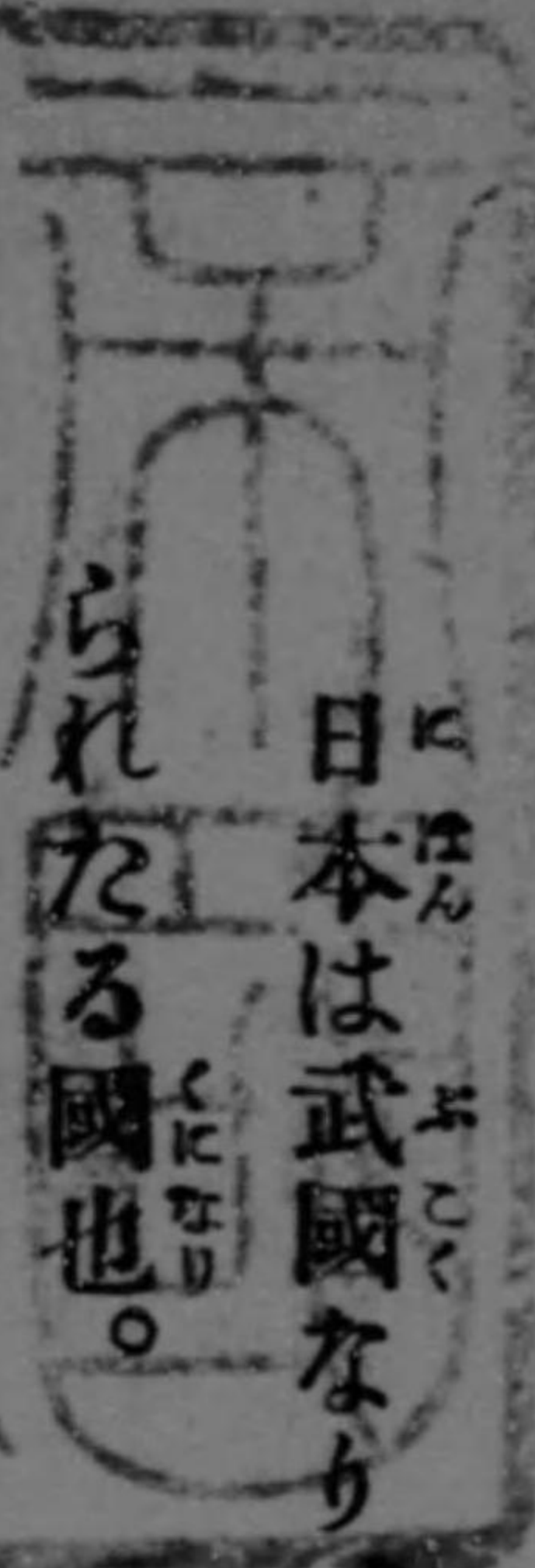
日本固有の王道……………(六三)

神 武 の 國……………(一二五)

國防本位の民心……………(一七三)

横範國民として義家を憶ふ……………(一八九)

武育論



日本は武國なり
られたる國也。

武を以て國土經營の精神と爲し、民衆指導の目標と爲して建鼎せ

日本は武國なり、その武は正義の執行權を意味し、正道護持の保障として存す、劍
を以て他を壓する振舞を以てのみ武と爲す勿れ、开は獸類の爪牙を以て弱者を壓す
ると擇ぶ所なし、武の貴ぶ所は心に在り、正義を護持する心！ その心に物質的保障
を附し、事實的執行力を賦與したるもの、是れ眞の武なり、この武は正しき文化を生
み且つ育す、この武は上天理を照し下は人道を支ふ、日本の建國は全く武に存し、
文教これに従つて起る、不思議の國なり、この不思議こそ、やがては世界人類の最後
を解決すべき至上の文化なり、世間通途の武は文を生まず文は亦武を顧みず、支那の

聖人は「文事あるものは必ず武備あり」と訓へたれども、これ文と武とを隔別して文事の爲に武備を雇ひ來れるの謂に過ぎず、故にいつしか離ればなれになりて、終には相反目するに至るべし、「文前武後」は儒の道也、「武前文後」は英雄の道也、「文武協調」は賢の道也、「文武一體」は神の道也、日本の武は此の神武なり、國祖神日本磐余彦尊に謚するに「神武天皇を以てせるもの誠に名詮自性の則に合ふ、げに神武の二字は、獨り天皇の性格主張抱負行動を彰し盡すのみならず、日本建國の意義を包含して餘す所なし、神武を祖とし、神武を國とす、民人いかでか神武ならざらんや、易に曰く「陰陽測られざる之を神と謂ふ」と、神とは不思議なり、不思議とは意義緊密にして、一點の隙なく、凡智を以ては測り知れざる境界を言ふ語にして、之を積極的に立稱すれば「妙」といふの外なし、故に玄義に曰く「妙とは不可思議に名く」と、日蓮上人曰く「妙とは蘇生の義なり」と、死人の活きかへるほどの不思議と歡びとはあるべからず、萬物各々その所を得るとは是なり。

されば國民意思の根本は、總じてこの武に基くことを知るべし、一國を擧げて武の自覺に入る、之を尙武の民風といふ、この尙武の民風より發し來る政治は眞の文治となり、これより發する民業は正義の保障となる、その業や正しくその富や貴し、かゝる尙武の國民より抜き擇べる軍隊こそ、その劍銃砲騎も光あれ、いかに兵營に周匝の訓練を施すとも、兵士に尙武心の基礎なき時は、兵役の大義も所謂「名譽ある××」に過ぎざらん、只是れ器械的兵役にして、精神的護國の義を成せず、心からの兵役は、國民尙武の大義を本とす、國民尙武の主眼は、神武建國の大意義より流れ出でざるべからず、國を擧げてこの正憶念に住せしむるの途は、國民教育の基礎をこゝに置くに在り、小中學の教育に其細胞を造り上げ、高等大學の教育に血液運行を促す、而して家庭と國家とはその骨を支持し其皮を養ふべし、かくて此尙武、發しては人文百度の花に咲き、凝ては國防威重の實を結ぶ、武は即ち正なり、正は即ち道なり、道の形は國土と現はれ、道の心は民と現はる、之を統綜一貫して、神人一如の上に儼とし

て立ちませるは、天照大神の延長にして、神武天皇の血族にまします吾天皇陛下なり、一國一族一天一日の靈境は、やがて世界人の最後の渴仰歸依所として、天が人類に與へたる自然趨歸の最大現象たるべきものなり。

武を尙べ、武を講ぜよ、武の心を養へ、武の意義を正思せよ、武を擴大せよ、武を徹底せよ、武の延長擴大は、直に是れ正義の延長擴大なり、之を武育論と爲す。

(大正十三年九月)

軍人教育の中心點

(昭和二年二月十四日陸軍教育總監部にて)

このほど當總監部から、軍人教育の事について、局外觀的の感想を話して貰ひ度いといふ御申出でございましたが、勿論その専門の事に入れば、お話しすることはできません。しかし軍人とか軍隊とかいふ事は單に軍人軍隊のものとのみ考へないで、吾々國民の性命と考へる、して見れば、國民がこれに對して國家の爲に考へて居る注文を、當局者に吐露するといふ道もあつて宜しからうと思ふ。

そこで私は、私の主張の下に會てより考へて居る一端を申上げて、御參考に具へようといふ約束で参りました。それで『軍人教育の中心點』と題して申上げます。

この軍人と申します事は、すべて國防に従事する所の一切を含んで居ります。で軍

人教育といふんだから、専門教育といふ事も含まれて居る。併し私の話さうといふ趣意は、その中の精神教育といふ方にある。そして『軍人教育の中心點』といへば、今私がこゝに話し出さうといふ事の中心點を申すのであつて、乃ちかういふものを軍人教育——所謂精神教育の——中心點としたいといふ注文であります。

それにはしかぐの教育といふ事も申上げます。しかし一般の軍人教養の全部に亘つて、その精神が一如して行く事の必要をやはり明して居る。譬へば大砲を扱ふとか飛行機を操縦するとかいふいろくの課によつて目が分れて居りませうが、なにしても所謂私の中心點といふのは、正しき中心點の教育として、別に存立する教育の外に、夫が精神的にあらゆるものに染み込んで行くといふ事を要求するのであります。そこで先づその基礎としまして、何が『軍人教育の中心點』であるかといふ事は後に申しますが、私の感想を腹藏なく申しますと、軍人としては、戦さを仕事とする人と考へないで、その前に日本人として考へる必要がある。『そんな事を今更いはれなくて

も、吾々は日本の軍人であるから』と事もなげに云つてしまへばそれまで、あるが、私の注文は單に日本といふ名を頭につけるとか、或はアメリカといふ名を頭につけるとか、どつちでも通用する様なものでなく、即ち日本の魂によつてつくられた軍人、かういふのが私の申す軍人である。而も其軍人といふものは、國民の中に於て一種別な階級である、別段の技術とか典禮とかいふものがあつて特殊のものだと考へないで、これは國民の精氣、或は精華と云つてもいいが、マア通常に軍人は壯丁の最も壯健なものを以て組織せられるのだから『國民の精』だといふべきで、國民を中心的に代表するものであるとする。それから國民の思想及び國民の行動の醇化したものであるといふところからも、『國民の精』として觀察して行く。

すると、單に軍隊教練の専門技術が完全に出来上つたから、これで完全な軍人といふ譯には行かない、その根本は國民の精氣であり精華である。さうするにはこの軍人の精神、それが日本國體の體現でなければならぬ。その國體より出でた國民性、即

ち國性の活現でなければならぬ。

私の方で申しますと、この「國體」と「國性」と分けませんが、「國體」といふのは國の根本でいひ、「國性」といふのはそれが用きの上に現はれたものであつて、この「國性」を忠孝とする。軍人はこの「國體」の權化であると同時に「國性」の活現でなければならぬ。それで始めて「國民精」といふ。これは變な言葉でありますけれども、話をするに便利であるから、かういふ名を假につけて「國民精」といふ。それは酒の醇を酒精といふが如く、それが國體の體現者であつて、同時に國性の發揚者であるといふ意味でいふ。

といふのは日本の國體の根源が世界平和を目的として 神武天皇により創建せられた、其根源は 天照大神の神勅によつて現はれたのであるが、其神勅に天壤無窮と宣らせられたといふ事は、之が不變の眞理を以てそれを事實に現はされた國といふ事から來てゐる、そこで「王道」といふ。この天壤無窮といふ事は敬語でない、事實だ。永

久不變の道理でなければ天壤無窮とはいはれない。力とか人力といふものは時あつて消長する、聚れば興り散れば無くなる、天壤無窮はさういふ不確かなものでない。さういふものを前提したものでない。天地自然の道理の如く、永久に變らないといふ様に不變の内容がなければならぬ。天照大神は誇張や何かを以てこの國を天壤無窮といはれたのではない、その事實を以て皇孫に付屬になつた。その付屬せられた内容といふものが即ち「王道」だ。その王道は 神武天皇に至つてそれを國家といふ組織に表現せられたから、その時に始めて 神武天皇は三大綱を以て現はされた。積慶、重暉、養正の三つを以て現はされた。單に言葉ばかりでなく 神武天皇の行動がすべてそれに據つて居る。

ところでこの國體、即ち一言にして申しますと國の道であります、それは國の道ばかりでなく、人類全體に普遍したものである。明治天皇は「之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられた、「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守ス

ヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」即ち時にあつては古今に通じて謬らざるものであり、方に約すれば十方に向つて違背せざるもの、それが道である。その道といふものを傳へるために日本の國はできた。道といふものを傳へ、道を弘め行ふといふ事の機關として造つたものである。國といふものがあつて後に道とか道徳とか、後から考へたのではない。これが 神武建國の大道理であるから、この國體には當然消極的の方面と積極的の方面と二つを有して居る。さうして其道の護りといふ事の現はれが政治とも經濟ともなりませんが、之を力の上でいふと一番顯著なものが武力であり、其内面を經營するものが文政である、であるから文武の政事といふ。神武天皇は追諡して神武。即ち神聖な武とせられたけれども、その内面は文政となつて居る。その神聖な文政が力となつて現はれたのが武であつて、その現はれた方面から 神武天皇と追諡した。

この 神武天皇は「壓の神」といつて、當時の人がみな驚いてゐた程の非常に強い

人である。それ程の方であるが、その政治經營の上に於ては、ほとんど玉の如き明光のある仁政を行はれた。また非常に文藝的の御方であつて、事ある毎に久米歌をお作りになり、さうして久米部をして歌はしたり、或はその歌に合して舞はせられたりした。これが久米舞といつて日本最古の舞踊であるが、今これは全部ではないけれども大體いくらかの影を傳へて今も宮中に存して居る。これは平安朝時代に再興せられた様であります、多少歌の調子なんか古の影はあると思ふ。私の會でも毎年紀元節に此久米舞を式の時に行つて居りますが、本年は都合によつて四月三日の神武天皇祭に延したけれども、この久米舞の舞樂を奏するのを見ると、その優雅にして藝術味に富んだ歌なり舞振りといふものは、實に高級な文藝であると我々は驚嘆して居る。さういふ偉大なる文藝味を内に藏して、外に向つては壓の神といはれるほど威力絶倫なるものを持たれたといふ事は、即ち日本國體の圓滿性を持たれたものである。であるから日本國體を政治の上に現はし、經濟の上に現はし、これを國の上に現はさな

ければならない。今の人は生きさんがためにどうするといふ事をよく云ふ、これが人間の第一だといふ。なる程それは必要には違ひない、けれども生きさんが爲にといふのは人間ばかりでない、蟲ケラでも同じ事だ。人間があらゆるものを代表するものなら、生きさんがために生きるなんといふケチなことではならない。

所謂社會問題、労働問題では、生きさんが爲にといふ事をよくいふが、たゞ食つて生きようといふのは唯物的な思想である。これは唯物思想の感化を受けてさうなつたのであるが、日本の國民は生きさんが爲に出來たものでない。恐れながら帝室も生きさんが爲にといふのではない、道を護り傳へるその事の爲に出來た、それによつて國といふものは成立つた。その國の中に帝室があり國民があつて、帝室も國民もみな道を護るといふ組織になつて居る。君民と分れては居るが、君はこの國を選定された祖神の代表者として、統治者であり、道の指導者である。民はその意思を受けて君と同一に道にむかつてすゝむ道の執行者である。故に教育勅語にも「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シ

テ威其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」と仰せられた。それが道だ、それを國體といふ。その國體を護る爲に國家は出來た。かくの如く國體を護る爲に組織せられた國家として見ると、國體そのものが日本の道である。だから日本の國家はなんの爲にあるかといへば、人民の生活を保護する爲にといふ様な、さういふ月並ではない。その道を護る爲に、保護する爲に建つて居る、かういふ理論になる。

そこでこの國體に當然伴つて居る用きに「消極的」の方面と「積極的」の方面がある、そこに國防問題がある。今日では主に外國の脅威に對するを國防と考へてゐる、それもさうだ。世界各國が眞に各々平和を希望するに於ては國防といふものはいらんのであるが、その規範を越えて他國の生活を脅威するものが出來るから、始めて國防が必要になつて來る。それは通常の場合にいふ國防であるが、しかし、日本の國防はもう一つ上の意味がなくてはならぬ。即ち道を保護する爲に、道の保障として力が要る、これが日本の武力である。所謂文化人なんといふのはまだ遠い、向ふ河岸の火事

よりもつと遠い。これを 神武天皇は、日本の國は眞に世界人類を保護するために建つた國である、で、我が子孫はその目的の爲にそれを要し、その位を要する。それはこれからばかりでなく、その傳統は遠く 天照大神に出で、さうして朕の代に及んで居る。それであるから、皇孫もこの目的の爲に進まねばならぬといふ事を「上ハ則チ乾靈國ヲ授ケタマフノ徳ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ、然ル後、六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サン」と仰せられた。即ちこれが第一で、國民の生活を保護するなんといふ事はその次である。

そこでこの國を護る場合に「蒙養」といふ事が必要になる。これは舍人親王が易經の文をおとりになつたので、蒙は子供といふことであるが、それはたゞ蒙昧といふ事ではない。天然を護つて行く、その生な所を護り育てる、それを正義に對する蒙養といふ。これは消極的の方である。さうしてこれを内に養つた結果はそれを外に向つて正義として現はして、遂にはあらゆるものを正義に引き入れようといふ、さうして世

界人類と共に樂しみを一つにしようといふのが目的である。其を 神武天皇は恢弘と仰せられた。「恢弘」といふのは日本は日本のための日本でなく、世界人類にこの道を弘めようといふ大目的を以て建てられたのが日本だから、これを大いに弘めなければならぬ、これは積極的の方である。

で我々が今武力を以て國を護らんければならぬといふ事は國防であるけれども、その國防の消極的な方面は「蒙養」、その積極的な方面は「恢弘」、即ち正義を以て他に及ぼすといふのである。今日は外交上のいろんな關係があるから無暗に出来ないけれども本來以ていへば無理を強ひても構はない、正しい事を分けてやるのには構はない。親が病氣の子のいふ事を聽いて居たんでは癒らんから、嫌がつても無理に藥を飲ませる。それと同じく日本國體も、それを人に強ひても可いのだが、強ひてやるといろんな問題を惹き起す。けれども要するに精神は日本國體の深義を——根本正義を宇内に普及するといふ事が必要である。さういふ大目的を以て建てられた國の國民は、それ

を目的として存在しなければ存在の意義がない。そこで今國防といふ上から云つても先づ内を護つて正義の觀念を養成する。正義の護持を要する。昔の武士道もその一面観だけでも、國體眼から観れば駄目だ。本當の根本精神から出た正義でなければならぬ。それは國體觀念から發したものである、それが「蒙養」である。

それが事に臨んで他に力を現はす時に恢弘となつて行く。であるから國防の衝に當つて行くものは、この國防の技術はよく修養しよく鍛鍊して、これが自分の眞の血となつて居らなければならぬ。上官から命令せられたから仕方なくやる、腹の中にはさうは思つて居ないけれども、據所なくやるのでは駄目だ。それは即ち身體なり心なりの全體が國體になつて居らなければならぬ。國體の化物になつて居らなければならぬ、それが日本の軍人である。

そこでその方法としては一番中心を何處に置くかといへば、道の傳統の主たる天皇に集注しなければならぬ。これは軍隊の方でも疾く既に教育の性命となつて居る事

は今更冗説するの必要はない。併しその尊王の意義が、私の考へからいふとこれもつと高潮して行かなければならぬ。然るに往々かういふ尊族に對する道德は、多く義務的の觀念の中に養はれて來てゐる形がある。例へば昔の武士道で言つても、過去に於て恩恵を受けたその恩顧に對して一命を捧げる、三代相恩の君であるから御馬前に討死するといふ様になる。するとこれは養はれた恩恵に對する義務といふ事から來てゐる。これを敷衍して行くと恩恵をうけなければ忠義をじなくてもいふ事になる。恩恵が薄ければ少ししか忠義は盡さない、恩恵が厚ければウンと忠義を盡すといふ。恰度晋の豫讓が、前の主人は餘り自分をよくして呉れなかつたから、別に命懸けになつて復讐する必要はないが、今度の主人はよくして呉れたから、命懸けになつて主人の敵に復讐するといふことになる。それを下級なものに應用すれば、我々は給料を貰つて居るから、その給料だけ務むればいふ様なもので、恰度芝居で主家の一大事に『二兩や一分の給金で、命を的にはかけませぬ』と、譜代の家來が逃げて

行く所があるが、あれが普通の世の中では當り前の様になつて居る。そんな脆弱な精神は、武士道でもいけないとして、忠臣蔵で寺岡平右衛門が「御家老も足輕も盡す忠義は同じ事」といつてゐるが、しかし義務觀念ではいけない。

また或人の如きは、日本國民の尊王心は理窟は要らない、感情的にやれ、恩義もへチャもない、感情的にやればいゝといふ事をいふ。けれども感情的にやるのでは理性に何も根據がないから、他からその固有の感情を溶解する様な偶然な強力なものに逢へば何時でも發散してしまふ。で私は感情的の尊王などは至つてつまらんと思ふ。俗にいふ「親分の竈」といふのでは、なんだか最負の僻目にやるものに過ぎぬ。またある學者は日本の帝室の尊重すべき理由を説いて、極く古いから尊いといつた。古いといふものはその古い所に値が生ずる、樹でもズットと古いと注連などを張つて大事にする。道具でも時代がつくと値打がつくといふ、そんな學者がある。これは古いといふ事が尊いといふ理由になつて居るが、若し古くなかつたら尊くないといふこと

になる。かういふ淺薄な理由に立つた主義精神が内容になつて居れば、日本は甚だ危険であると思ふ。

日本の帝室は感情のために尊重する帝室でない。また古いからといつて尊重さるべきではない。そんな古い新しいものを超絶して居る。明々白々の道理によつて、自分の宗教の安心を憧憬する所の佛教徒が佛陀に歸依するよりも、キリスト教徒が天の神に歸依するより、それよりもつと深遠な力と、現實的な力の上に立脚して起る尊王心でなければならぬ。これを佛教の言葉で申しますと「自體顯性」といふ。「自體顯性」といふのは、その持つた體からひとりでは出る所の性質といふ事で、外からくつつけた理窟でない。その自體顯性の義理から現はれて來た尊王心でなければならぬ。それは義務的な觀念で以て壓迫するといふ様な事で行くなられた義理でない。佛教では自體顯性から出た場合の用きをば自受法樂とも安樂行ともいふのである、尊王もこゝまで來ねばならぬ。

例せば日蓮聖人は生涯いゝんな迫害にあつて、死罪だの流罪だの、或は斬られたり打たれたり、所を追はれたり焼打せられたり、二十餘年の間この宗教弘通のために迫害せられた。これを法難といふが、日蓮聖人の御弟子や檀那の中には、これに對して怖れを抱いたものはいくらもある。日蓮聖人は死罪でも流罪でもなんとも思はない、けれども弟子檀那の中には怖れ疑ひを抱いたものがあつたのでこれに説明して、日蓮が法華經のために斯ういふ迫害に遭ふといふ事は、罪障の身で法華經を讀んだからである。併しこのために罪障はだんく消えて行く、だからこの迫害を受ける事は我等にとつては自受法樂の境涯である、『災難の來る事を以て日蓮の安樂行となす』といふ、それを自受法樂といふ。なる程これが義務でもつて、『私もかういふ廻り合せに來たからウントコシヨで仕方なく我慢して居る』といふのでは、何等の光がない。この自受法樂の境涯にならなければ、所謂義務といつても交換的の義務であるとか、或は片務的の義務であるとかいふ、さういふゾンザイな觀念では日本の尊王は解釋出來な

い。その義務よりもつと超越した本領がなければならぬ、義務よりも本領である。

伊太利のムツソリーニが、國民には權利といふことはない、『國民は國家に對して義務はあるが權利はない、否唯一つある、權利といふものが唯一つある、それは何かといふと國民の義務を遂行するの權利あり』といつて、一流の政策を行つて居る。併しこれは嚴密な理性から出た主張であるかどうかよく研究して見なければ判らないが、たゞ義務ばかりあつて權利はないものであるといふ。兎に角權利と義務と相對的にある様なそんな境涯にあつてはならぬといふ所に氣がついたものである。所謂自受法樂の上に立つたものでなければならぬといふ所に、いくらか近くなつたものである。それは國體學でどういふ所にあるかといふと、日本の君民は一如の組織である。君主の外に國民といふものが別にあつて、さうして國民はたゞ被治者であるが故に統治者から壓迫せられて居るといふ、かういふ昔の觀念がソツクリそのまゝ來て、それに多少文化の結成した觀念から現はれた尊王心では、君民一如の道理を爲さない。

一體近代を支配して来た民主主義といふ思想は、彼等の國では是非ともあゝいふ風にならなければならぬ組織である。これは彼にあつては當り前である。一如したくても一如すべき君がない。君主國といふ様なものがあつて見た所で、それはたゞ或一時の力で、たゞ壓迫したものに名けたものである、所謂劣敗者に對しての特權者に名けたものであつて眞の意味の君主でない。だから、それがだん／＼自然に歸すれば、恰度大統領の様になる、人民の代表者となる、名は帝王でもやはり人民だ。併し乍らこの民主主義とかいふ様な世界一般の思想の中心は、今日までエッサモツサやつても將來必ず破綻が来る、既に來て居る。どうしても將來は君臣組織でなければ眞の平和は來らない、ところが他の何れの國にも理想の君といふものがない、従つて理想の民もない、ドンダリの背比べだ。

その中にひとり日本だけは理想の民と理想の君がある。これは先天の君であり先天の民である。それを日本の國性が明かに證して居る。その委しい説明は今日は時間が

ないから出來ぬけれども、日本の國は、他から來つて統御したといふのでなく、君民兩方とも高天ヶ原から來て居る君と民だ。瓊々杵尊は君主の御系統として御降臨になつて居る、それと同じく既に天より降られて居た饒速日命は臣民として降られた、さうしてその率ゐたものを、いゝ按排に國中に分布して居られる。その天上の文化を齎らし來つて從屬の神を配置したといふ事から觀察して見ると、ウヨ／＼そこに集つて民業をどうしたといふのではないことが判る。これは國史家も國學者も餘り考へて居ないが、之を一番よく解せられたのが神武天皇である。神武天皇は日向から大和に御出になつた時、こんな邊鄙ではいけないから、いゝ所を見付けようといふので來られたのではない、始めから大和を目的とせられた、之は何かといふと即ち饒速日命が降つた所であるから——既に天孫民族が降つて下地をつくつてあるから、そこに「佛造つて魂入れる」といふ、これを統轄する必要がある、そこで國を經營しなければならぬから大和に來られた。この事は「古事記」にはないけれども「日本書

「紀」には明らかに書いてある。それで見ると君民手を携へて來て國家を經營された事が判る。

經營とは何であるか、即ち前に申しました國體を保護するといふ事である。その保護の中には弘める事がはいつて居る。護るといふ事は毀さないばかりでない、擴げる事が必要だ。それが君民一如だ、君民一如のこの「如」といふ事は「かなふ」といふ事である。種々の方面から離れぬにないで、その意義を一致する事である。

それでこれを「體」に就いていひますれば「君民一體」である。「用」については「君民一致」である。これを組織から見ると「一君萬臣」である。君がドツサリあつてはならない、君は一人であり、それを取卷いたものは澤山なければならぬ。この一君萬臣の形を「相」といふ、國體、國性、國相の國相だ。國體に於ては本を一つにする、國性に於ては相照らす、國體は本體、國性は性質、國相は姿であり、組織である。併しこの三は別なものでない、こゝで君臣分を正しくして始めて君と臣といふ

關係が起る、それが「相」だ。故に君彌尊くして民彌尊くなる。

「義は即ち君臣にして情は父子」といふ事が先帝の即位の詔勅にある。之は、雄略天皇の詔勅にもある。仕事の上に相は分れて居る、君の道は君の道で民の道と一つでない。民の道は服従を専らとする、君の道は人類を掩ふ所の道の統轄者にして、民はその意思に従つて行ふべき執行者である。即ち「相」の上では違つて居る、それで居て仕事では一致する、「體」に於ては一體である。如何となれば國體の道から現はれた、その道に朝宗するからである。明治天皇も『朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』と仰せられた、それが「體」である。「體」の因分を道といひ、その結果を徳といふ。するといふと君を離れた民もなく、民を離れた君もない、これ君民の組織だ。従つて君主を崇敬する事は即ち民を敬重する所以であり、また民の用きを極度に尊重する所以である。

だから民といふものが君と別になつて居つて、何か搾り取られる様に考へて居つて

はならない。君の命は喜んで聞かなければならない。君國の一大事に際しては君國に身を捧げるといふ事はよくある、あるけれどもそれが一時的の發作ではいけない。『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ』といふ事があるけれども、一旦緩急がなくても常に義勇奉公の精神が充實して居らなければならぬ。それが内に充實して一旦緩急の場合に出るのでなければいけない。その時に發作的では鐵砲の音が濟むとまた元の通りグラクになる。それは深遠なる國體の觀念から發生するものでないから面白くない。

そこで聊か國體學の上から、一寸この君民關係の優秀な所以を簡単に進めるが、私どものいふ國體學といふのは、世間の國家學者がいふ國家學と大變違ふ。それは日本人の從來の考では、學問は西洋でなければいけないといふ様に言はれて居る。それは西洋のものが勝れたものもある、併し西洋のものが考へたのは西洋の事實を以て考へて來たのであるから、向うにないものはどんなにしても考慮の中に入れる事はできない。彼にあつて此にないものがあり、此にあつて彼にないものがあつて、日本の國

といふものは彼等の眼中には映じない。映じないからそれには向うで感じない。さういふ一面のみを見た彼等の思想、それを金科玉條の様子に考へて居るのは日本の學者の迂闊にも程がある。それ等の所謂國家といふものは、私どもにはせればそれは國家でない。たゞ人間がウヨク集まつて國家の眞似をしてゐる人間の巢だ(笑聲)。燕や何かの巢と同じだ、然るに神武天皇の開創せられたものは、非常に嚴肅なものである。彼等の所謂天國といふ程の國だ。であるからさういふ國の例を持つて來て、日本の國家をその範圍に入れて、主權者と人民と領土とその三つだけを以て國家を構成せられたものといふ様な學者では、日本の國家はどこまで行つても判らない、如何と云らば日本の國家は、民力發生以前に國の精神といふものがあつた、目的があつた、主義があつた。その主義によつて後に形になつて造られた。

さうすると日本の國家を造り日本の國家を形成するには、精神主義といふものを閉却しては日本の國家は飽迄解せられない。それから日本の國家は萬世に亘つて動かす

べからざる一つの垂統の本祖、即ち御先祖がある。この御先祖なる神は過去に遡つては限りなく久しく、また後にはその神の子孫が君臨して永久に延長する。それで天壤無窮といふ。その天壤無窮の現象たるやそれは何時始まつたか、それは歴史以前の事であるから何萬年前であるか算盤では弾く事ができない。恰度久遠實成の本佛の様なもので何時から始まつたか判らない。久遠の本佛の如く天の神の如く、既に此宇宙の眞理の存する限り存在するものである。それから現はれて來た神様を先祖として居る、而もそれはどこまでも延長して行く。御先祖 天照大神はどこまでも延長して行く。だから代々の天子様を『現人神』と申す。御肉體は、凡身を受けた凡夫同様であらせられる。けれども、繼承ましまして來る所の位とその御徳は、神様からそのまゝ傳はる、即ち人間であると同時に神様である。けれども人間本位でなく神佛が本位である。であるから 天照大神の延長であらせられる。

それをば餘り人間がボンヤリして居るから、私はこの頃算盤の達者なものに算盤で

勘定させようと思つてゐるが、天壤無窮といふ事を數學的に解釋したら何億萬年であるか判らぬ。でこの御一代の天子様について、假に一萬坪なら一萬坪の山陵を要するものとしたら何萬年か何十萬年の中には後に天子様の御陵で日本國は埋つてしまはなければならぬ事になつて居る。もつとも日本で米一粒でも出來ない様になつても構はない。天皇の御陵で埋るその前に世界中は統一せられなければならぬ。天壤無窮の道と徳と力とにより世界は統一せられなければならぬ。即ち單に干戈に訴へて取るといふそんなものでない。『刃に動かずして天下を平げん』と 神武天皇は仰せられた。絶對平和だ、それは神の心を以て御顯しになつた。日本國はさういふ國家であるから、日本の國家を解剖するには、君主と領土と人民では解釋できない、どうしても日本になくはならないものが五つある。神と道と君と民と國土のこの五つが具はらなければならぬ。

即ち第一には、御先祖の神である。それも辨天様とか不動様とかそんな神でない、

人間の醇化した聖人にまします。だから、吾が『皇祖皇考乃チ神乃チ聖ニシテ』と神武天皇は仰せられた、朕の先祖は神聖だとまをされた。それを八百萬の神といふからすべて神といふ、この神を離れて日本は考へられない。ギリシヤでもローマでもアメリカでもこの神はない、日本には國より先からあつて國祖とせられて居る。この一番大切なものを學者が考へ漏して居る。そんな輕薄な考へを以て、この日本を解釋しようとするから——さういふ淺薄な頭で學生を教へたり何かするから、學生がロシアの眞似なんかする様になる。それから神の心、即ち此の國の創立者の精神を傳へる、我々の據るべき軌道、それが道だ。それが日本の心だ。其道には道の奉行者が要る、行ふ人が要る。即ち君と民である。

その中の統率者が君だ、即ち神の御裔であつて、血統者であつて、同時に道統者であつて——神の心を繼ぐ道統であつて、さうして御自分の身體ともいふべき國民に之を行はしめる。さうしてこの國の創立者ともいふべき神の心を永久に傳へる、萬世に

傳へる、それは何時までも新らしい。今の人の新らしい思想といふのは何か變つたものが來ると新らしいと考へて居る。夫は新らしくはあつても本據のない新らしいものである。今直ぐになくなつてしまふ新らしい味である。恰度ビカ／＼光つてゐてもブリキの様な新らしいもので、今の新らしいといふのは眞の新らしいものでない。本當の新らしいといふのはさういふものでない。本當の新らしいものといへば恰度太陽の様なものである。古いものといへば太陽位古いものはない、それでゐてまたそれより新らしいものはない、永久に新らしい、さうして同時に古さと尊嚴さを保つて居る。日本の帝室も夫と同じく太古にして太新、さうして永久に傳はるから天壤無窮といふ。天壤無窮を天津日嗣といふ、天の日の心を嗣いで來て、どこまでも普及して行くのが天津日嗣、道を以て萬民を統治するのが天津日嗣の御位だ。これを奉戴してその仕事を分擔的に行ふのが我々人民の仕事であるからこれを天業といふ、天の仕事といふ。天皇陛下は天業の主であつて、我々國民は天業の當事者である。

それから次に領土、どこの國でも領土がなければ國とはいはない。けれどもあらゆる國の領土といふものは、これはたゞ人民が其處に集まつて、其處に出來たものを探つて食つて、地下から石炭をほじくつて、石油を汲んで、金銀石材等を使つて、何かをしてゐるといふのなら、それはまゝ事の大きなものだ。

まゝ事はまだいゝけれ共、生きんがために生きるといふので他を壓迫して互に生きる事のみ理想して居る。茲に於て無理が生ずる。それが衝突してそこで鬭争が起る。結局數千年かゝつて人間の文化といふものは、何が結論でおしまひになつたかといへば、如何にして人間が多くの人を巧みに殺し得るか、自分が如何にして樂に暮せるかといふ事で他を侵略しようとする事に終つたのである。これでは孔子でもキリストでもどうする事も出來ない、實に偉大なまゝ事だ、併し罪なまゝ事だ。そんな人の爲に國土といふものがあつて、食物を與へたり樹木を與へたり、金石を與へたりするならそれ等の國土から現はれる物資は、人をして罪を造らしめる罪の資料だ。こんなものは

亡びてもいゝ、こんなものに物資を供給するのは勿體ない事だ。

劍でも、軍人諸君が持つて居る劍は國を保護する劍、警察官のは悪い奴を防ぐ劍、同じ劍でも泥棒が持つたならこれを兇器といふ。正宗の名劍でも何んでもこれを兇器といふ。まさか巡查さんが持つて居るのを兇器とはいふまい(笑聲)。同じものでも使ひ様によつてさうなる、物資でもさうだ。悪い奴なんかは物資がなくて飢死した方がいゝ、さういふ民族なんといふものはどつかへ飛んでしまつた方がいゝ位である。

眞の國土の資料といふものは道を護る資料とならねばならない。木一本でも、石炭一塊でも、人類の平和を保つ所の資料となつて、神の御光の下に役立つて行くものでなければ國土は何の役にも立たない。日本の如き、かういふ目的の爲に建つた國であるから、その秀麗なる山河あつて五穀穰々として實を爲す、米も麥も豊富に、下から掘り出す石炭や石油や金銀もある。鐵なんかは今は足りない、併し今につきあつて出る様になる、今に世界一の鐵國になる時がある、屹度ある。天照大神が此國をお選

びになつた時に、此國は此天業を恢弘するに都合のいゝ國だから吾が子孫を此處に降すと仰つた、『千五百秋ノ瑞穂國ハ是レ吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ』と仰つた、だから永久に亡びない。山河秀麗にして五穀穰々たる國、物資潤澤なる國、あらゆる人の集つて来るに來よ國、一切の地上の人類が朝宗し融和する可能性のある國あらゆる人類を統御するにこんないゝ所はないといつて日本をお選びになつた。だから鐵も屹度あるに相違ない、人間がボンクラだから出ないんだ。(笑聲)

世界一の富士山なんといふものがある。あんなもの、形がなんだといふなら、まだ苦勞が足りない。『尾張名古屋は城でもつ』といふが、あの金のしやちを乗つけたといふ事が偉いもんだ。マアあれが金だつて何だつて實地の國防上何んでもない、けれどももあすこに金のしやちを乗つけた所が大變面白い。その城を尊重するといふ一種の温情風映がそこに現はれて居る。いま以て三京と自稱する、名古屋人の自稱に中京といふ、自分免許で中京といつて居る、けれども中京といつても可笑しくない丈の

抱負がある。それは何から養ひ來つたといへば、金にしたら二三百萬圓の物であらう、夫を頭に乗つけても減る譯ではないが、あいつが朝日にピカ／＼すると何ともいへない。それが郷土人士に我が『尾張名古屋は城でもつ』といふ様になつて來る、それもいくらか愛郷心からさうなつて居る。誰が造つたか知らんが偉いもんだ。富士の山なんといふものはその意味に於て實に偉大なものだ。畏れ多くも明治天皇が富士を題詠せられたものはたつた一つしかない。他の題詠の中に富士をお詠みになつたのは澤山ありますが、富士山といふ御題は一つしかない。けれども古今の詩人歌人の富士を謳歌したもので、あらゆる嚴肅な文學より見て、明治天皇御一人の富士を讚美なされたものに及ぶものはない。あらゆる人がたゞ美しいといふ事はいふ、氣高いといふ事はいふ、けれども明治天皇は、

萬代の國のしづめと大空に

あふぐは富士の高根なりけり



とお詠み遊ばされた。もう既に國體といふ精神を、あの富士の風致風景の上に御詠詠なされた。それは即ち精神的御觀察であるけれども、『萬代の國のしづめと大空にあふぐは富士の高根なりけり』といふが如き、花では櫻、形でいへば富士、かういふ様なもの、風致風景の上にかくの如く現はされた。それが國民精神に及ぼすものは、實に偉大なものである。また日本は米の國といふ、瑞穂の國、これは米ばかりでない、あらゆる物なりがいゝといふ事である。土地豊穰にして物なりがいゝ。土地豊穰といふのは山岳河海の地勢の關係で、水蒸氣などの調節よろしきから來たものである。けれどもこの物なりの五穀種々としてできた日本に年々米の收穫が減る、なんで減るかといへば農村の荒廢によつて減る。これは農村文化なんといふもの、履違から、農村の青年で都會に出て來る者が多くなつたからである。都會に出て中學でも卒業したものはもう鍬鎌持つのがいやになる。勿體ない事である。日本の國の起りの御先祖の天照大神は自ら耕し自ら織られて、勞働を以て國の生命とする事を御教へになつた。今

でも大嘗會は 陛下躬ら儀式を以てせられるといふ、國の性命としてある。これがさういふ状態になつたといふ事は、歴代當局者の怠慢もあらうけれども、さういふ風に農村が弛緩した爲に收穫が減る、さうしてボンヤリカンであつて人間ばかり殖える。人間の殖えるといふ事は、國力の増進でいゝけれ共、『小人閑居して不善を爲す』といつて、やくざな人間ばかり多く殖えたら何にもならない。今日日本では年々七十萬人づゝ殖えるといふ、さういふ風に人口は殖えても反比例して米の收穫は減る。これは政治も國體を忘れて居る、法律も日本國體を忘れて居る、商賣でもなんでも國體を忘れて居る、さういふ結果から算盤の違が出て居る。元來この國土の産出するものはみな力だ。なんの力だ、すなはち道の力だ。民の唯一の力たる道の力とするその尊い使命を持つて居るのがこの國土だ。生きさんが爲なんといふのはその次だ。それが何がなしに生れて來たから生きるといふ、そんな奴は生きる必要はない、國の穀つぶしになる、娑婆ふさぎになる。そんな奴は許さるべくは、年に何回位か、どつかへ持つて

行つて無くしてしまふがいゝんだ(笑聲)。これが佛教の大乗の慈悲だ。併し國民が一人たび自己の本領に覺醒した時には、一人でも國を背負つて立つだけの力が底に潜んで居る。教へが悪く社會が悪くからヤクザなものがドツサリ出來て來た。道によつてすれば、みんな國の生命となる性質を具へて居る、これが日本魂となり、其日本魂が根本に觸るまで出て來れば、『千萬人と雖も吾れ往かん』世界を一人で背負つて立つ程の力が其處にある。そこでいまの五つであるが、これを國體の上で申せば、神は天の理であり、道は人の道であり、君はこの道を以て統治する中心であり、民はその統治を翼賛すると共に、その努力をもつて事業の衝に當る分業的な當事者、それから國土はその資源であり、力の源であります。

若しこれを道といふ上でいへば、神はこの國を造つて我々に命令した所の開導者であり、我等の爲に御自分の御子孫をお降しになつたといふ國の祖先である、この生々したる神の意、これを神道といひ、神の道といふのだ。それを誤つて何か神さまはか

ぐら太鼓をドンドコ敲いて參ればよい、あれを神の道などと思つてはならない。さうしてこの神と道と君と民と國の五つが離れない因縁を感謝しなければならぬ。

因縁といふものばかりは横間から拵へる事はできない。我々が國に居る、この因縁は離れる事ができない、我々が天皇陛下に於ける關係、これはどこからどうする事もできない。日本が正しい道によつて世界を統一するといふ、それも因縁だ。それからその神の心即ち天の道を我等が護る時にこれを王道といふ。然るに此頃の人間は、人間は人間の道を行へばいゝといつて、教育の方針もたゞいゝ人間を造ればいゝと思つて居る。それもまアよからう、悪くはない、けれどもそれは第二だ、日本の人間といふものはさういふ第二のものは必要でない。いゝ人間より「いゝ國民」を造る事ではなければならぬ。良い人間でも良い國民になるかどうか判らない、幸徳秋水でも難波大助でも或は良い人間であつたかも知らない、だが悪い國民だつた事は事實だ。だから日本の人間は良い人間を造るよりも良い國民でなければならぬ。

そこで即ち神の心が天の道となり、それが 天皇陛下の上に移つて来て何になるかといふと、之は前にいつた「王道」になる。王道といふのは天の心を人間の仕事の上に移して、さうして地上の人間の文化と天の心を一にするといふ意味だ。この王といふ字がさういふ事を訓へて居る、上の一は天で下の一は地で中の一は人である。天地人三才を貫くといふので棒を引く、即ち三才を一貫した夫が王道だ。これは何處にもない、字は支那で造つたけれども支那にもない。堯舜の如きは理想の聖人といつても途中からつながつて来た理想の聖人に過ぎない。日本は理想でない、事實だ、これを王道といふ。

「吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ」と 天照大神は仰せられた、之が天人一體の王道だ、これを以て國を治める。それから人民はそれを翼賛する、即ち臣従である、「君命ずれば臣従ふ」といふ事がある。然るに動ともすると民意の政治といふ、政治が民意から出る——國民の心を以てやるといふなら帝國憲法はどうする。

政治家がよく民意の政治なんといつてしきりに騒いだものだが、憲法の制定者である所の 明治天皇は何と仰せられたか、誰が何といつても憲法の解釋に就ては、制定者たる 明治天皇に背く事はできない、 明治天皇は憲法の神様だ。その憲法の神たり主たる 明治天皇は何と仰せられた。憲法發布の御勅語の中に「朕カ意ヲ奉體シ、朕カ事ヲ獎順シ」とある。誰の心を本とするでもない、「朕カ意ヲ奉體シ、朕カ事ヲ獎順シ」といふ、この爲に今憲法を授けたと仰せられた。民意の政治家がそれが不服なら、これからして改めて貰ふ事を請願しなければならぬ。けれどもさういふ事が一體間違つて居る、君意に對する所の民意といふものはない。民の仕事は、君の御事業を翼賛獎護するにある。従つて、民意とは當然君意と合致したものでなければならぬ。それを西洋の眞似して民意の政治なんといふ事を文化の開けたものと思つて居るなら實は蒙昧な政治である。そんな事を世界の輿論なんと今以て學者も考へて居るといふ様な事では駄目だ。おそらく今に考へつくであらう、占者の様な事をいふけれど

もさうなるに相違ない。この意味に於て日本國體の内容を以ていへば、もう君も民も離す事はできない、「君中民あり、民中君あり」、體は君民一體にして、用きは君民一致である、この君意を奉じた民意こそ本當の民意だ。さういふ憲法政治が行はれなければ理想の立憲國でない、その意義を綜合して國を護るのが世界の眞理だ。

即ちこの軍隊はその意味の護國を醇化したものである。で軍人諸君は、我々は鐵砲を持つて戦をするものであるから、産業には關係がない、政治にも關係がないと思つてはいけない。それは仕事の上には直接關係がない、平時にサーベルを持つて政治に關係したり、産業に關係したりするといふ事はできないけれども、その性命は政治道徳産業に行き亘つて居らなければならぬ、これを護國の醇化といふ。軍國主義とかいつて歐米かぶれの人間は悪い事の様に思つて居る。成程軍國主義はいゝものでない、けれども日本の護國軍事といふものは神聖なものである。かういふ意味あひから軍人教育の中心といふものを此處に置く必要があると思ふ。

そこで私は軍人教育の中心點として、まづ「中心教育の把住」即ちつかみ所、それは以上申上げた國體精神により内容の儼かなる尊王心を、義務的でなく信仰的に確立する必要があると確信する。

勿論今日の軍人教育に於ては、軍人の勅諭と申すもの、特に平易簡明なるものを、お下しあそばされてある。併しこれは軍人にでなくやはり國民にである。その御勅諭は萬古不磨の大典である、御勅諭で十二分、あの御勅諭以上に加ふる所はない、がその背景には深遠なる哲理を持つて居らなければならぬ。従つて堅固なる信仰を持つて居らなければならぬ。で私が今當局者諸君に御願したいと思ふ事は——國家のため滿腔の精神を捧げて申上げたいといふ事はこれを信仰的に捧げる事でありませう。信仰といつても拜んでどうするといふ宗教的ではない。先づその項目を擧げると、前に申し上げた因縁である。これは佛教の言葉であるが、國と我等、帝室と我等、道と我等、神と我等、かういふ事は離れない因縁のものである。これはどんな學者が出て來

てもどうする事もできない、それは絶対だ。

茲に於て建國の使命といふものになる。それからつぎには絶対原理として、この世界平和といふ事、これはもう、キリスト教でも、佛敎でも、最後の目的とするところはそこでありませう。佛敎でいふ安樂世界、常寂光土なんといふのは、絶対平和の境界をいつたものであります。常寂光の三字は恰度日本國體の積慶、重暉、養正と神武天皇の仰せ出された三綱に當る。これは如何なる哲理からも何等異議はいへない「絶対平和」である。眞の絶対原理であるがたゞ人の想像や理想のみの上に傳へられたものでなく、日本の事實の上に傳へられた、それだけの違ひがある。

それから次は「絶対信念」、聖徳太子のいはれた「君命ずれば臣従ふ」といふ事がある。然るに今は、階級あればこゝに闘争あるものと思つて居る、階級は争ふものとして居る。争ふ爲の階級も世の中にはあるか知らんけれども、階級といふものは整へる爲のものである。その整へる爲の階級を、争ふものと考へたのは、身體を養ふもの

を身體を毒するものとした様なものである。それは精神を本としないで物の上から考へたからである、唯物的の解釋であるからさうなつた。

物の性命は精神であつて、精神の用きが物だ、その物心二つの、完全に融和したものが日本だ。これが最後に世界の到達すべきものである。それで私は曾て英語獨逸語等を以て「世界を擧げて日本國體を研究せよ」といふ宣言書を世界各國に送つてやつた。さうすると方々からそれに對する意見がやつて來たが、最も注目すべきは社會主義者のメーブスといふ獨逸の學者が、我々はマルクス系の信者である、我々の宗旨は物から出發して物に歸着するにある。然るに田中氏のいふ日本國體の理想は精神から出發して精神に歸着するといふ、これだけ違ふ。が我々が大いに刮目すべきは、この田中氏のいふのは、精神から出發して精神に到着するけれども、その間に物と調和して、さうして物と心と一如して——物心一如して、さうして最後に精神に一如するといふ事は、我々社會主義者の大いに研究する必要があると、有名なる「フオールヴェ

ルツ」前衛といふ紙上で書いた。これはどうも陽貨といふ泥棒が孔子に似て居たといふのと同じ轍か知らんが(笑聲)。さうしてメーブス君は、「神武天皇の絶對平和の主義たる詔勅を擧げてゐる。殊に「刃に觸らずして」といふ所の如き、特に大字を以て擧げてゐる。從來、日本の新聞といふと、人殺や盗人の事は大きな活字でデコ〜にやつたが、國體がどうしたといふ様な事は蟲眼鏡で見なければ判らん様にやる(笑聲)。やつぱり西洋人は頭がいゝゝ、これぢや今に獨逸あたりに日本國體學の學者が澤山出來て本場の日本人があつちに行つて、日本國體學博士なんといふ名義を向ふから貰つて來る様になりはしないかと思ふ(笑聲)。

その秩序を保つべき階級が、——ものを整へる爲に拵へた階級が——それがあつては自由平等はないと、階級を追拂つてしまつたなら、それは飛車も角も何もなくなつて、ただ歩ばかりで將棋をさすのと同じだ(笑聲)。何んでも「君命ずれば臣從ふ」といふ、之は一番よい最大安心の形式だ。君の爲なら一命をも棄てるといふと、なんだ

か命を持つて行かれるやうに思ふか知らんが決してさうでない。自分の一命を君に捧げるといふ事によつて我が一命が大きくなる、プレミアム附でもつて行つていゝ位である。

それがどうも考へ方が悪いと親孝行なんといふものは片務的であるといふ様な事を考へる。この頃の忠孝觀念といふものはさういふ様に現はれて居る。親に何年育て、貰つたからその乳の代を拂へばもう親に義務がないといふ、それを立派な理窟と思つて居る、情けないものだ。親の様な情愛とか道德といふものはこれは天性だ。それは義務でない、それよりもつと大きなものが日本の忠孝の觀念である。忠孝といふものは、月並の支那傳來の忠孝である位に思つて居たら、何時までも日本の忠孝觀念は判らない。

忠孝といふものを 明治天皇は克忠克孝と仰せられ、臣民の大本にせられた。即ち「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」といふ、それを總括したものが克忠

克孝である。日本の忠孝は徹底した大いなるものである、親の給仕するなんといふ部分的のものでない。日蓮聖人は忠孝の二字を解して「世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す」と徹底的に解釋せられて居る。で、この教育勅語には忠といふ事は一つもない、一つも忠といふ事は擧げられないが、「以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と最後にある、これが忠である。であるから父母に孝も、兄弟に友も、夫婦相和するも、朋友相信するも、あらゆる個人道徳も家庭道徳も社會道徳も、最後に天壤無窮の皇運を扶翼するといふ一つの大きいものになる。これは支那人の經驗しないものである、まして況んや西洋の國家にはなほ更聞いた事もない。

日本はさういふ世界最後の光となるものを持つて居る、それを値打のないものと思つて居た。公債證書で張つた着物を反古と思ひ込んで残屑屋に賣らうとした人間がある。その日本の忠孝を知らずして、西洋の柏學問を大學で教へられて、それが世の中に出て來ると一人前の思想家の様に思つてゐる。學問しないから鬼熊なんかは人に馬鹿にせられるけれども、確に所謂現代思想を代表して居る、あれで大學卒業でもして居れば一種の思想家だ(笑聲)。

併し信念とか因縁ばかりではいけない、これを理性に訴へなければならぬ、これが所謂國家の根源を極むる學問だ。現狀に解決を與へる學問、今一番それを絞つて來て打棄つて置けないものはなんだといふと世界の問題だ、世界を如何に始末つくるかといふ、この解決をつくる學問、それは學問の王様だ。この世界的の解決、この心理的傾向を物に現はして來る。すべての政治法律の現象でも、一切日本國體から理性的に解決し、或は科學的に解決し、純理性的に解決を加へる、それでないと動搖する。折角の信念がやうく出來かゝつたと思ふと、所謂赤化思想なんといふものが現はれて、一ぱし國の爲と思ひ乍ら、あのフリーメイソンなんかに入つていゝ氣になつて居る、さういふ爲にこの明確な理性の判斷が必要である。

それから次に「絶對安心」これは信仰に根ざしたものであるが、國民の心得の置き

所はある堅い絶対安心になければならぬ。それは無論皇室に朝宗するに違ひないが、この皇室の存在は世界の救済所として天照大神がお建てになつた人類の何ものにも替られない尊いものである。我々はその皇室のお仕事を分擔して實行するといふ高貴なものを持つたものであるといふ、それを絶対安心の信條とする。世界を救済するといふ安心、この安心といふのは佛語であるが、この世界最高の救済であるといふ、それが安心である。

それがあればこそ無限に強い。さうしてその社會に及ぼす影響は、これが政治の中核となつて行かなければならない。軍人が直ちに政治政策をやるのでないけれども、政治の中核とならなければいけない。

それを常時軍人は政治に關與してはいけないといふけれども、若も日本が不良の徒のために攪亂される様な事があれば軍人が中核となつて治めなければならぬ。私が假に時の總理大臣であつたら、さういふ不良分子があれば、軍隊で包圍して片端から誅

戮してやる。従前の内閣は何か新聞が悪くいふのを、それを氣にしてヘドモドしてゐたから陣笠にも馬鹿にされた。何もそんな事にビク／＼する必要はない。命を棄て、國を護るといふ覺悟を以て斷行する、従つて安つぽい命ではならない。この中に天下國家を支へてゐるから、いざといふ場合には軍人だつて政治に關與せねばならぬ。その意味において、常に政治の中核であらねばならぬ。

それから産業も軍隊が性命となつて居らなければならぬ。いくら加藤清正だつて孔明だつて、物資がなければ戦争はできぬ、軍隊に護られねば産業の性命も安全とはならぬ。それから道德の背景が軍隊、學藝の原動力も軍隊である。それら一切に亘つて國防精神を失つたなら、政治でも經濟でも道德でも學藝でもみんな拔殻になるといふ、これが私の意見であります。

で以上の國體學を精神の基礎とするその方法を一寸申し上げますと、私は國體學講座といふものを、あらゆる軍隊に置いて頂きたいと思ふ、それを二つにする。

第一は純學問としての方法、即ち哲理の方面からはいる方でありませう。これに就て陸軍は中隊なら中隊の規律があるから、これを統一して教育するといふ事は出来ないといふ事を聞いたが、これは何んとか國家のためであるから考へ直さなければならぬと思ふ。それからもう一つは應用です。これも單に聯隊長とか中隊長が訓示するといふだけのものでなく、學問的に基礎が立つて居らなければならぬ。で今私はこれを國體安心といふ、その教育の資料としては古往今來一番痛切に我々に國體の教訓を下された、先づ明治天皇の御製がいと思ふ。それからもう一つは國體學の哲學的信仰の確立、これはたゞの理窟ばかりでなく、やはり哲理からはいつたものでなければいけなう。

それから第二には國性史觀的國史教育、これは一寸變な名前ですが、考へ様によるとうまい名前だと思ふ。これは日本の歴史を誰がどうしたといつて頭から理窟で行くより、さういふ日本國體の動き、國性の發露といふ事の種を教へなければならぬ。

それには國性史觀的に國史の大系を觀察する。例へば天照大神の神勅を誦したり神武天皇の建國に於ける御趣意。或は崇神天皇が宗廟を開放せられた偉大なる世界的發展——これを天照大神と一所に居つては畏れ多いからといつて、崇神天皇が大和笠縫邑へ太廟をお遷しになつたといふ事を、日本の歴史家はさう考へた——私は青年時代からどうもこれが氣になつてならない。そんな馬鹿な法はない、なぜならば一所に……といふことは天照大神の詔勅に「與ニ床ヲ同クシ殿ヲ共ニシテ齋キマツレ」とある。だから天照大神からの御命令を守つて代々の天皇はずつと一所にいらつしやつた。夫が一所に居るのは畏れ多いと怖れ戦いて大和にお祭りしたといふなら神勅違反ではないか、それも崇神天皇がたゞ温良恭謙な方であられるならそんな事もあるかも知らんが、正史によると大なる經綸の御方だがある。そのお方がそんな事のある筈はない。でだんく私に就て研究してさうでない事を考へた。近く私はこれを發表する。これは天照大神はこれまでは帝室の御先祖である。國民は帝

室の御恩澤に未だ普く潤はぬ、だから宮中深くお祭りしてあつた。しかしだんく王化が布かれ今や王化に順伏せぬものはなくなつて来た、天下は天子を信じて統一して居る、だから日本中は帝室の延長だ。よつて天照大神は單に帝室の個人の御先祖でない、國民全體の祖神であるといふ事で、宮中から大和の笠縫邑にお遷しになつて宗廟を人民に開放せられた。然るに我國の國學者も國史家にもさういふ宗廟開放といふ偉大なる斷案がなく、たゞ一所にお祭りして居つては勿體ないからお遷しになつたといふ位に解釋して居る。けれども經綸の大家たる崇神天皇がさういふ迷信的な事をなさる譯がない。さういふことで國民精神を涵養する楔とせられた。

それから垂仁天皇の殉死を廢せられた御改革。景行天皇が御自身の御子、日本武尊をもつて遠征を企てられた意義。或は神功皇后が外征せられた時、外國の國王が降伏して来た、左右の者は、これを斬らうと申上げた所が皇后は「降を斬るは不祥なり」と、お聞き入れにならないで、洪大なる御慈心をお示しになつた御事蹟。或は

應神天皇の御代に、始めて大陸の文化が渡來し、皇子稚郎子尊は率先してそれを學ばれた如き、またこの稚郎子尊と御兄君大鷦鷯尊が互に三年の間御位を譲り合つて、遂に稚郎子尊は意を決して菟道川に身を御沈めになつた爲、已むなく大鷦鷯尊が位に即かれたのが仁徳天皇で、其仁徳天皇の御仁政の如き。それから欽明天皇が佛教をお容れになつた、即ち世界の文化を消化しようといふ準備にそれを御容れになつた御英斷。聖徳太子が精神的に日本の國體を以て世界の文明を融合せられた大事業の如き。聖武天皇が大佛建立に事寄せて國家に一舉に王化を布き、及び外國から名僧を招待して開眼供養をさせるなど、世界戒壇の抱負を持たせられた御大志の如き。或は恒武天皇の平安遷都や、その他の國體宣揚に關する列聖の御思召、別しては明治中興の偉業に於ける第一に五箇の御聖詔、第二に帝國憲法、第三には教育勅語それから軍人勅諭、戊申詔書、それから現世相に亘つて雲間の片鱗を仰ぐが如き何萬の御製の中から傳へられた千何百首の金玉の御製、これは私は大帝詩經と密かによん

で居りますが實にこれは唯の文藝的御詠と考へる事はできない。文藝的に見ても代表的なものであらせられるが、これに就て大正天皇は國民精神作興の詔書に於て何と仰せられたか。今は國民は振作更張すべき時である、それ故振作更張の道を教へてやる、それは他でもない、明治天皇の御教を徹底的に實行する、それより他に道はないと仰せ遊ばされた。然らば大正天皇の興國の御精神は明治天皇の御教を國民に徹底的に實行せしむるにありとの思召である。而して今上天皇もまた御踐祚の初めに於て、皇祖考の遺業を繼承し、皇考の思召を奉ずるの外、朕の仕事は無いと仰せられた、實に先帝今上共にその思召である。

であるから大正天皇の興國の大詔に據り、今上天皇の御精神を體して、さうして明治甲興のこの偉大なる聖天子、即ち神武天皇を再びし天照大神を三度した様な明治天皇の御精神を以て教育する、これが信仰の本である。

そこでこの私が話し來つたのは、單に講壇に於て教授するばかりではいけない。定

めし軍隊でもさういふ儀式があらうと思ひますけれども、私の注文はあらゆる軍人をして、出来るなら兵營の庭において一日五分間位、朝でも何時でもいゝが一番いゝ時間を神聖時間として、上長たるものが先に立つて宮城を遙拜するといふ事を實行して頂き度い。これは軍人精神を形容の上に現はして行くもので、それはほとんど宗教的歸依の如きものである。それで一番最初に敬禮をする、軍人の禮法で手を上げるのも鐵砲をあげるのもいゝが精神的にそれをやる。その次に明治天皇の御製の一首をとつて、その上官が音頭をとつて、僅かな事であるが二遍づゝ繰返して奉唱するといふ様な事をやつて頂いたなら、如何にも精神及び肉體共に匡正する事ができるであらう。

私の軍人教育の根源といふのは即ちこゝである。そこで今日は教育の關係の方がお出になつて居るから、何等かの御參考になると思つて、局外者として自分の腹藏のなことをいつた。といふのは、いくら局外漢としても國家の軍人であるから、すなは

ち我々國民の軍人であるから、その點から腹藏なき注文を爲した次第である。でその實行方法に於ては定めし困難な事であらうと思ふ事がある。陸軍大學は陸軍大學で出來た方法があり、聯隊では聯隊で出來た方法があるから、さういふ統一方法は一寸採れんといふ事があらうかも知れぬ。それは私は彼此申上げない、けれども私のいふのはそれ以上にもつと必要があらうと思ふ。でなんとといふ會議であるか知らんが、陸海軍の首脳部の方が寄つて、一つ國家の爲だから、今日の貴郎方に御注文していいかどうか知らんけれども、元帥でも大將でも此處で頭を寄せて一つ相談して頂き度い。さうして若しその統一方法が困難であるならば、これは私が創建して居る國體學——まだ學校といふ様なものは拵へてゐないが私の腹の中にある。この頃私の伴が國體學概論といふものを書きました、私も先に國體學の概論見た様なものを書いたけれどもまだ忙しくてホンの順序と骨組だけで統一してゐない、でこれがいいといふ事になれば、あつちの學校やこつちの學校で私は國體學の師範教師といふものを拵へる、さう

して何人か——例へば陸軍大學に居る石原君の如き、あゝいふ頭のいい人を捉まへてやれば單刀直入に要領を得る學問だから、一年もやつたらいい。さうしてあらゆる學問をみんな淨化して、『兵家は兵に將たるべく』應用する。南面の學問だから——大王學だから應用せられていい、それも一年位でいい。

そのあひだでも、若しこれが、さういふ教養法を加へる必要があるから、一つやつて見てもいいといふ御考へがあつたら、私は一つ御相談する事がある。自分から自分を縛るやうだけれども、一年間試みといふので、當局者が積極的に提議するならば、先づ陸海軍大臣、遞信大臣を説きつけて、あのラジオを各軍隊及各學校に備へつけてそこで軍隊の共通した一番都合のいい時間を定めて、毎日なら一日二十分づつ、一週間一回なら二時間位づつ、さうして百日とか一年とか試みに今の國體哲理や國體安心の教育をしたらいいと思ふ。これが出來れば私は無料を以て、いろ／＼多くの用事があるけれども、それを割いて放送局に出張して講演してもいい。私もあつちこつちの

方々の學校から頼まれて、まだ行けずに氣の毒であるけれども、ラジオなら毎日二十分やれば、その爲に御大葬の時の様に日本人がみんな聞く様にすればよからうと思ふ。これは私の個人としての考へで、軍人當局の方々に會つたから、この機會に一案として、実行案の一例を提供して置く。併しそれは今の國性史觀の歴史の上から神武天皇の詔勅によるか、或は明治天皇の御製を中心とするか、それは判らん。けれども國體觀念といふものに、直に聞いたその日その時から、何等かの感化がなかつたならば、止めてしまふがよい。たゞ知識として話すだけで、右の耳から左の耳に抜けるやうなそんなものでは駄目だ、そんな無精神なら、やる私も何にもならない。それで出かける時に門から頼む様な意味で頼まれたんぢや困るけれども、國家の爲に重大なものであるから、一遍やつて見ようといふ案であつたなら、マア陸軍大臣と海軍大臣と遞信大臣と三人相談すればなんでもない事だから私もやる。

私はラジオが出来た始めに、あんなつまらん娛樂ものばかりやるより、總理大臣で

も内務大臣でも施政方針に就て親しく國民に講演するとか、殊に宮内大臣は隔日に一遍くらの、陛下の御日常の御事を放送するがよいといふことを再三勸告したが、到頭受け入れなかつた。で今日は家庭を攪亂すやうな吝つたれた淫蕩な唄ばかりさかして困る、其がかういふ事にラジオを使つたらラジオも成佛するんだ(笑聲)。で私は出来るか出来ないか知らんけれども、今日考へたことを一案として申し上げた次第であります。

以上申し上げたやうに、人間の教育といふよりも、國體的の緊切な進化状態に教育する講座と申しますか、なんと申しますか、軍人教育の、なにか性命ある中心の正科一講座として、將來お置きあらんことを當局者諸君にお願ひして置く次第であります。

日本固有の王道

(昭和三年十二月東京偕行社に於ける將官談話會席上にて)

本日、このお集りに、自分に國體に關した話をするやうにといふ御依頼でございましたから、『日本固有の王道』といふ題の下に存じよりをお話し申上げたい。

『日本固有の王道』といふ、この「王道」といふ事は、大體支那の書物から傳來した名前でありませう。また事實も支那の王道、霸道といふ對抗の上の「王道」を採つたものと理解せられて居る點がありますが、名は「王道」と同じ名でありまして、日本の「王道」はその實體は全然趣を異にしたものである。随つて支那以外の世界列國には、無論似つかはしい名もない、全く特殊のものであるといふ事のお話を致したいと思ふ。

そこでこの「王道」の王といふ事は、日本の文献では、『日本書紀』の天照大神の

神勅から起つて居ります。即ち

「葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ國ハ、是レ吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ」と仰せられた、その「吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ」といふ、夫に舍人親王は「王」の字を當て、「可王」と記された。

「是レ吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ、宜ク爾皇孫就テ治ラスヘシ、行ケヤ、寶祚ノ隆ヘマサンコト、當ニ天地ト窮リ無カルヘシ」

これは 天照大神が日本をお撰びになつた神勅であります。これ我が國家及び君主の依つて起る所でありまして、この神勅から日本は創まつて居ると申してよろしいのであります。

ところでこの 天照大神の神勅は、歴史といふよりは、寧ろ神話ではないかといふ様な疑問があります。併し日本ではこれを神代史と稱せられて、やはり國の有史以前の歴史の體裁を持つて居りますから、全然神話とすることは出来ませぬ。神話に織り

込んだ歴史を持つて居りました、神話が歴史を供し、歴史が神話を供するといふ形を以つて成立つて居ります。記録のない前の云ひ傳へものには、極く茫漠たる太古の云ひ傳へが一番中心としてあります。即ちその民族の忘るべからざる中核の言ひ傳へが、歴史の骨子を爲して居るのであります。

それからまた假に或る論者のいふ如く、神話は神話であつて歴史でないとしても、我が國は、その神話を骨子として立ち、理想として立つたものであるから、國の精神は同時にそこにあるといふ事は明かにいへるのであります。天照大神が御子孫を降されて、天下の主となされたといふ、その御子孫といふものが、事實に於いて儼然として存して居られる。御子孫が既に存して居られるのに、その御子孫に傳はつた「道」とか「仕事」とかいふものだけを、これは神話なりとして切棄てるといふ道理は全然ない。日本の歴史の源、それから國家の主義精神は、立派にこの神勅より發祥して居るといふ事は、躊躇なく斷言し得るのであります。

それからモウ一つの謗難は、「古事記」や何かは、現に言ひ傳へをそのまま記録して傳へて居る、これは一點の文飾がない、であるから素朴である、けれ共眞實である。然るに「日本書紀」の如きは、舍人親王が漢文を以て修飾せられ、所謂支那風に文書を誇張してある。であるから立派な文字が使つてあるけれ共、それは一つの飾であつて、別に内容があるのでないと、斯ういふ風に考へて居る人が今でもある、昔もあつた。殊に國學者の中には、漢文でかいたといふ所以を以て、ひどく毛嫌ひをする人がある様であります。これ等の事を今私が得失を論ずる事は問題外になりますから、それは別の話にして、兎に角一言、漢文を以て修飾しても、それはその義理を判然させる爲に修飾したのであつて、作爲したのではないといふ事をいつて置きます。

それからまた、「日本書紀」が漢文によつて書かれたから、「古事記」の如き素朴な眞を保たないといふ事に對しては、これは舍人親王が大いに考ふる所があつて、義理を言ひ現はすに一番都合の良い漢文を使はれ、漢文の原則により漢文の正しい規格をあ

て、撰ばれたといふことは、寧ろ用意周到のなされ方と申さねばならぬのである。

それで稗田阿禮が話をした、それを太朝臣安萬侶が書き傳へたといふ「古事記」は無論現存最古の史籍である。だが阿禮は歴史家ではない、思想家でもない、學者でもない、たゞ古の事を覚えて居た、その話を安萬侶が書いたといふだけで、嘘はいはないだらうが整つては居らぬ。で「古事記」に對して私がこゝで價値の有る無しを論ずるのではないが、成立ちはさうである。然るに一方「日本書紀」は、朝廷にあつて一世の重望を負ふた所の、「知太政官事」といふ、太政大臣事務取扱ともなられ、薨去のときは、贈太政大臣となられ、淳仁天皇の時には、崇道盡敬皇帝の追諡まで賜はられた、さういふ重要な皇族の首班で在らせられ、さうして學徳の高い、實に聖徳太子にも次ぐべき所の大人格者たる一品舍人親王が、勅命によつて總裁となり、公に國家の仕事とし國家の力を盡して書きのこされた、かくの如き公の事業は、到底一個の記憶話の傳へとは同類にいへないのであります。

そこでこの「日本書紀」の最も優れた価値のある點は、あらゆるその當時の文献傳説を全部渉獵して、さうして公平に之を取捨簡擇して議り、さうして綜合せられた所の、一番正確なものを本文に記録せられて尙ほ捨て難い一説は、みな悉く「一書に曰く」として上げられてある。この周到な事によつて如何に「日本書紀」が完全なる行届いた、國家的歴史であるかといふ事を明かに證明して居るのである。

さういふ公にして、且つ明確な用意によつて書かれた勅撰の國史、それが偶々漢文で書かれたといふことを以て、外國文を以て書かれたから不可といふ事は、それは甚だをかした事である。一口にいふともの、道理の分らない事である。外國文と申しますけれ共、日本の言葉は義理を分ける上に於いて便利の悪い事がある。何故ならば日本の古代といふものは單純率直であつて、そんなに色々な思想なんといふものは混亂してをらなかつた。極くすぐやかな明快な民族であつた。然るに支那に至つては大いに趣きを異にして、前からいろ／＼な理窟もあつて所謂人文が盛んに現はれた。で

その思想を現はす言語文字等に於いてもそれに相應した準備を持つて居る。であるから支那の文字は、いろ／＼な義理を基礎として作られた。例へば日本で「みる」といふ事は、どう書いても「みる」の一詞である。ところが支那には「みる」といふ事がいろ／＼ある。「見」の字も「みる」である、「觀」の字も「看」の字も「視」の字も「みる」であるが、それが各々字が違ふから義理が少しづつ違ふ。「おもふ」といふ事でも日本では一つであるが、支那ではいろ／＼ある。「念」の字、「思」の字、「憶」の字、「想」の字、みんなおもふと訓まれるが、字が違ふたんにみんな意義が違つて居る。

斯ういふ所から考へると、その義理を質して、多端なる多くの含んだ義理を傳へるには、この洗煉せられた古い文化の支那文字を使ふが便利である。便利だからその字を以て日本の言葉を譯した。だから「わがみこのきみたるべきのところなり」といふ事を「吾が子孫ノ王タル可キノ所也」と譯された。この「王」の字を使はれたといふ事によつて、この「きみ」が、會長の大きなものとなつて、多くの人を統帥して壓迫

する所の勢力を持つといふ君主でなく、即ち「王道」を行つて、天の如き政治を布いて、天の行ひと叶つた事を爲すべきものであるといふ事が、この「王」といふ字を用ひられた事によつて判つたのである。そこがこの舍人親王の日本の國史を作るに漢字を持つて來られた譯である。

それからまた自國の歴史を自國の言葉で傳へないで、外國の文字を用ひたといふ事はいけなしいといふ文句がありますが、そんな小さな料簡ではいけなしい、外國だの自國だの、さういふ小さな事をいふべきものではない。元來日本は日本の爲に出來た國ではない。日本といふものは世界中の爲に出來た國である。世界中の一切の文化を綜合統一して、こゝで仕上げをして人間のまごつかない様にしようといふ、その大使命を以て建てられた國である。その爲に出來た國であるから、日本の天皇は 天照大神が宇宙人類を、この正道によつて統一して、人間の總ての惑いと惱みを絶滅しようといふ、大規模な事業のために、王統を降されたものだ。

仕事にはその仕事の立脚地が要るから、その仕事に一番適切で、且つ便利であるからして日本を根據地として把住せられた。であるから全體いふと、日本といふ事も實際的に一國家としていふ日本はこれは止むを得ない假の現象である。本來からいへば日本といふのは世界が日本である。日本は世界の中心といふその爲に建つて居る。それは道が中心であるからである。この日本の版圖といふものは、これはたゞ便宜上此處が便利であるから立脚地としたが、目的は世界である。世界中のあらゆる文化は日本の道具である。支那の文字だとか、印度の文字だとか、何處の思想傳統だとかいふ事は、その産れた地に依つて名前がついてゐるが、その用ひる底にはみな日本國體の爲に、世界中の聖人も賢人も出た。これ程の大理由を以て立つて居る。尾張に出來た大根だから尾張大根の名はつけて居るが尾張の人でなければ食はないといふ事はない。日本中の人が食つて居る。けれ共尾張に出來たものだから尾張大根といつて居る。であるから支那の文字であらうが、印度の文字であらうが、西洋の文字であらうが、

現はすに便利なる事は全部採つて用ひるのが日本の固有の思想であります。その實例を、聖徳太子が示されてあります。佛教は印度、儒教は支那の思想、それぞその支那の儒教と、印度の佛教を取つてお用ひになつても、敢へて支那を崇拜なさない、印度を崇拜なさない。例へば支那の儒教は枝または葉のやうなものである。印度の佛教は花または實のやうなものである。日本の國體の道が根本であつて根であるとするういふ見地である。日本の國體を以て根として、それから支那の儒教を以て枝葉とし、佛教を以て果實となされた。だから若しあの時分西洋の文明が傳はつて居たら、やはりこれも聖徳太子によつて枝か何かにはいるわけだ。あらゆる文化を採り來つてこの國體で淨化する、それだから、この國體は一切の文化に超越した「道」であるからどの國の文化でも用ひざる所がない。ないかはりに本末を謬らん様に用ひなければならぬ。即ち日本國體といふものを根源として、日本國體で淨化してそれから使ふ。

例へば三韓か六朝の美術を日本に輸入して來ても、始めは模範を採る爲にその通り模倣して居るが、ドン／＼採つて居る中に、これに日本的意匠をダン／＼加へて、しまひにはフンワリした日本化されたものが、其藝術品として何れも残つて居る。一例を申しますれば、奈良の藥師寺の藥師如來、彼の形式は純然たる日本的である、けれどもその生れ出たところは、やはり三韓または支那の美術を模範として居る。日本人が作るとあゝいふ圓滿相を爲して居る。それから音樂でも何でも、傳へるときはそのまゝ、間違ひはない様に傳へて來るが、久しくして日本化するといふよりは、所謂日本的、國體的の淨化劑を加へ、淨化してから用ひるといふ、斯ういふ様な趣向である。佛教もその通りである。印度山出しの佛教を其儘持つて來て日本に植つけようといつても出來ない。大乘佛教は印度に性が合はない、合はないから議論は盛んであつたが傳はらない、小乗だけが後に傳はつた。支那にも渡つたが氣息奄々として居る。日本には小乗の俱舍成實も宗として傳はつたがこれは事實上成立たない。學問だけはあ

るが宗としては成立たない。それから大乘の三論宗、法相宗、華嚴宗、何れも存して傳へられて居る。けれども三論、法相、華嚴宗は古から發達しない。それは小乗の教理は一言にいふと孤調解脫といつて、人を濟ふといふより先づ自分が此の苦しみの世から脱れようとする、自分だけが悟り澄し三界の苦しみを脱するといふ事を主とした主義である。ところで大乘といへば己を捨て、他を救ふといふのであるから全然拵が違つて居る、即ち犠牲の精神が極めて向上したものである。小乗はこれと正反對である。孤調解脫といへば自分だけ悟を開くのであるから日本の道に合はない、合はないからやはり成立たずにしたつた、たゞ書物が残つた。どうかすると新しがり屋が、時々奇を衒ふために何とかいつても一向性質にはまらない。これに反して大乘は日本國體の道に合ふから發達する。大乘の中でも法華經の如き純大乘は、最も日本の性に合つて居る。日本の國體と一致して居る。

さういふ譯で何れの國の文化でも、悉くみな日本の國體の證明すべき材料となり

また肥料の様なものにはなる、けれども本體とはならない。本體は日本國體といふ確固たる道がある、事實がある。學問でも議論でもその事實を證明する爲だ、事實の後を追駈けて來て説明する爲だ。例へば忠孝などといふ事は、これは支那の書物から來た、多少の義理學說も支那から來た、けれどもそれが來たから日本に忠孝が出來た譯ではない、支那から忠孝の教が來ない前に日本には實物があつた。其文字が來たから之に當てはめようかといふので當てはめた。それが事實に重きを置かんものだから、今度は説明のために根本が稀薄になるといふ傾向を生じた。だがそれは後の話であつて恰も病氣で熱に浮かされて居る様なものだから例にならない。支那毒に中つたり、佛教に熱心するの餘り、遂に日本の國體を忘れたやうなことがある。恰度、西洋の文化に陶醉して日本の固有の「道」を忘れ、固有の純良な風俗を破壊して顧みないといふのと同じ事で、それはみな病的現象である。だからさういふ病的現象は定規にはならない。本當の自分から出た、いはゞ本音といふものは忠孝の文字がはいつて日本の



忠孝が出来たのでなくて、かへつて清淨無垢の忠孝の事實は前からチャンとある、實物がある。

實物たる薬はこつちにある、それからその薬の後から追駈けて、あらゆる國々の聖人や賢人、立派な人達が、種々なる教をもつて、これを證明するのが能書だ。それは薬の爲の能書であつて、能書の爲の薬でないから、いくら能書がうまく出来て居つても、能書を飲んでも病氣は癒らない。日本國體は薬の様なもの、あらゆる聖人の教は能書の様なものである。聖徳太子はそこで三道融合といふことをせられた。それであるから自分で儒教の道服道冠を召して印度傳來の袈裟をつけ、笏を持つて、さうして日本國體を發揮された。十七憲法を制定せられ、日本の文化を開發せられた。これ世界中の文化を悉く靈化して一體にした形である。これは 明治天皇の御誓文にもあらはれてゐる。

舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

の御文とその意は一つだ。この天地の公道とは日本の國體で、この國體に背いた中途の舊習を破つて固有の公道を顯はせとの仰せだ。また皇基といふのも日本の國體だ。廣く智識を世界に求めて、その世界の智識に迎合して、その通りに我國がなつてしまへば、それは外國文化の模倣だ。皇基を振起するのではない。「よきをとりあしきをすて、外國におとらぬ國となすよしもがな」といふ御製の思召は、外國の文明を、いやが上にも文化の光を放つといふ様に、採らざる所なく、用ひざる所なきまでに、周匝綿密完膚なく眼を世界に放つて、その優れた所をみんな採り用ひる。その結果、大に皇基を振起する。皇基といふのは國體であつて皇道の基をいふ。それを振起するため廣く世界に智識を求め、その智識の中に皇基があるんでなく、皇基はこつちにある。米はこつちにある、肥料は向ふから持つて来る。從來の人はその皇基を振起する事を忘れて、廣く世界に智識を求むる事だけをやつて居る。肝心な根本を忘れて、徹

頭徹尾西洋の文化でなければならぬ様にいふ、恰もあわくつた奴が、肥料がさくからといつて、肥料をかけて食つたらうまからうといつたやうな鹽梅だ。さういふ顛倒はみんな本末の誤りから来た。

世界中が日本であるといふ事を多く人は何かそれは誇大妄想の見だといふ風に考へて居る。世界中が日本であるといふ事は、極く遠慮して小さくいつたものである。眞理といふものは宇宙大である、人類だけの社會だのといふそんな小さなものではない。眞の平等といへば法界の平等でなければならぬ。この世の中に住んで居るものは人間ばかりではない。まだ動物も棲息して居る、動物も共に吾々と同じく生活をして居る。そのすべてに亘つた大公至誠の道でなければ、眞の平等といふ事はいへない。それを牛を殺したり、豚を殺したり勝手にするが、あいつは人間の食物の爲に出来て居るかといへば、彼等の爲にはさうでない。彼等には彼等の能力がある、人間程横暴なものでない、けれ共人間だけの器量がないものだから牛や馬は人間の食物だといふや

うに考へて居るが、大宇宙から考へたらさうでない。人間は能力があるからといふなら、それでは人間以上の天性の侵掠能力があるものに猛獸がある。さうすると人間は猛獸の食物となつて差支へないやうになる。

けれ共人間は萬物の靈長として、先づ天地の徳を發揮する大能力がある。彼等禽獸は自己保存の本能が先だつて何等考へを持つて居らぬ。人間はそれ以上に天地の徳を發揮するといふ任務を持つて居るから、天地の代表者で、即ち天地の最大恩寵に浴する資格を持つて居る。だから先づ人間本位である、佛も人間本位で教を説かれた。だから天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なんといふ天龍八部などいふものが經典にあるが、みんな人間の像となつて居たとしてある。この萬物をみな神とする思想からそれを人間化する、太陽でも月でもみんな人間の姿になる。で人間は今の天地の徳を發揮する意味に於て天地の代表者である。その使命からいへば先づ人間の國なのだから、宇宙を人間のものとしても、大してどつからも尻が來な

い。その宇宙大の眼孔から観れば、今吾々の居る世界といふものは、人類といふものがあつてそれが棲息して居るが、この宇宙の洪大な現象から見れば、今のこの世界に居るところの十億ぐらゐの人間は、ほとんど蟲眼鏡で観なければ判らない、ホンの小部分のものである。小部分のものであるから今我々の現實はこれだけで一切梟をつけてくれ、ばい、が、この小さいものではあるけれ共、これだけでも始末がつかない。何洋だとか何國家だとかいふものが方々に分れて、その利害の關係を異にして居る所から、種々なる葛藤が生じて戦争も起る。所謂列國の競争といへば、經濟の競争あり思想の競争あり、また民族の競争もありして、その競争は一轉して抗争となり、戦亂となつて、始終人間の歴史といふものは、取つたり取られたり、ぶつたりはつたり斬つたり斬られたりで終つて居る。その事件を縫つて居るものに、種々の政治現象や人物現象があつて誰が英雄だ豪傑だといふ話が残つて居るが、それはつまりその事柄を行つて行くについて出た皮相である。大偉人とか大英雄とかいふ時代々々を彩つて

行くものは何から來たかといふと、純精神界を除く外、大抵は所謂利害關係、衝突抗争の上の現はれて來たものである。

これが歴史の大部分である。これを何時までも同じ様な事を繰返して、何千年経つても、たゞあゝいふ事をやつたといふ事だけでは人間には永久に平和といふものは來らない。そこで永久に退轉しないところの眞の平和を建設するといふにあらざれば神の事は成就しない。神の仕事は所謂天の事業である。神の心を人間の事の上に行ふ、その天の仕事を行ふのに、その統治者があつて、それからそれを行つて行く一定の規則がある。これはチャンと典據がある、その通りにやつて行けばいゝ。それからその下にこれを擁する所の人物が要る。それからその立脚地も要る。その根據地から人物から、一切の物が揃つて、この大事業の最初に立つて行つたのが、日本國家の抑の傳統である。それは天照大神の神勅から起つた。それを『王タル可キノ所也』、即ち王道を布く所に適當した地と仰せられた「可」といふ事は「かなふ」といふ事である。

それに適合した可ふ場所が日本だといふので、日本を撰ばれた。それを「書紀」には『可王』の二字を以て顯はした。『可王』といふことは、彼の人の物を取つて得た、今の所有權力的なものでなくして、天照大神が「王道」を布き行つて天下を救ふといふ、即ち人類救済の事業である。それが「王道」であるといふ事をこの文字によつて證せられる。

それからもう一つはたゞこの國を盛んにしたい、自分の子孫をあそこにやつて、子孫の榮えを圖らうといふ様な、小規模な事からでは斷じてない。今いふ『王タル可シ』の言葉の上に明かに王道の實行が證明されて居るのみならず、それと同時に御教として、鏡と璧と劍の三種の神器が授けられてある。別して鏡は、『此ノ鏡ヲ視ンコト吾ヲ視ルカ如クスヘシ』と仰せられた。さうして瓊々杵尊にお渡し遊ばされて以來、御代々の繼承者は其三種の神器を傳へる事によつて位と國との相續の證據としてある。これはたゞその位の繼承を證するばかりでなく、その鏡に寓し、劍に寓し、璧に寓し

た内容が、器によつて現はされて居る。鏡はものを照すものである、劍はものを斬るものである、即ち勇斷である。璧は溫然を表はしたものである、即ち善徳である、慶である。鏡はものを照す、即ち邪正を分つといふ智慧、文化をいふ。その蒙昧を開き世の混迷を去つて明かな道につかせようといふ文化事業、それが鏡だ。斯ういふ動かすべからざる器を以て、傳統の寶として傳へになつたといふ事は、この神勅と相對して一點の議論のない建國の要領である。

それが後に人皇の世となつて、即ち神武天皇が正しく國家を建設なされた。神武天皇は國家を建設なする時に神武天皇御自分の一人のお考へでなされたかどうか神武天皇には一點の私の望みもあらせられなかつた。即ち皇祖皇考の命ずる所によつて家代々傳はつて來た道理を、その實行する機關として國家を造らうといふ、それは天皇自ら仰せられた『皇祖皇考乃チ神乃チ聖ニシテ、慶ヲ積ミ暉ヲ重ネ多ク年所ヲ歴タリ』によつて知られる。即ち、慶を積むといふことは、仁の徳でありま

す、「めぐみ」であります。暉を重ねるといふことは、暗を破る文化、即ち知識の名前
であります。それを積むといひ重ねるといふことは、これ御一代限りでない證據だ。
代々さうして来た、さうして以て朕が身に及んだ、これが身の務め家の務めである。
これが精神眼目である。これを大仕掛にやるには國家としなければならぬ。國家とし
なければ、整然としてその道を後に傳へる事が出来ない。また遂行に就いては力とい
ふ背景が要る、力は物質によるべきものが多い、よつてその物質の力を背景として、
その精神の道を發揮しなければならぬ。

そこでこの精神は物質と相離れて居つては用を爲さない。日本國體は精神である、
道である。それを實行するには國土を經營して行かなければならない。山から金をホ
ジクリ出すとか、田園には耕作を加へて五穀を作るとか、或は蠶を養つて、吳服を織
るとかいふ様な事もさしてさうして利用厚生之道を人間に與へる。人間はこれによつ
て土壤の榮養を受けて立派な體質を具へ、また學問技術に於いても益々進め行くべく、

さうして人生の開發に資して行つて、それが最後には、この道を弘め、世を救ひ、人
を導く所の徳になつて行く、その力がなければならぬ。そこで國土を要する。それ
がほどよく發達しなければならぬ。國土に住むものと住まはせられるもの、調和を
はからなければならぬ。今でいへば政治であります、その本が政治であります。政
治、經濟、文藝あらゆるものを綜合して文化を咲かさなければならぬ。さうするに
は、邊鄙な日向に居つて、僅かに獨りを守つて所謂獨善主義に陥るやうなことがあつ
てはものにならない。これは世界的に發揚すべき道であるから、世界的に弘めるべく
國の趣向を具備しなければならぬ。

そこで 神武天皇は、我れ聞く東に大和といふ所がある、茲には曾て饒速日命が降
つて、天神の裔として高天原の文化を世に布き行つて居る、依て朕も之より其地へ移
らうと思ふと仰せられた。即ち唯今で申せば天上文化、それを人類に布くといふこと
が 天照大神の思召であるから、その準備として饒速日命が 天神より遣はされた。

その時は三十餘部の神を率ゐられた。三十餘部といふから、あらゆる團體があつて、それにはまた大勢の從屬がある。それが種々の道や技を以て、即ち天上文化を地上に分布せられた。であるから大和地方を根源として弘まつて居る。それから經津主神、武甕槌神が文化を持ち來たられて居る。古くは神武天皇の御即位の前に安房の國に神を祀られたといふ。日蓮聖人は天照大神の御厨は房州に造られたといふことをいはれて居る。或は宮下文書によると高天原は富士山であるといふ説もあるが、兎に角天上の文化といひ、高天原の文化といふ高級文化、聰明な文化は天照大神を中心として地上に布かれた。食つたり飲んだりすることばかりを目的として、生きんが爲に働くといふやうな低級な人類を超越して、總ての人間に天地の徳を維持せしむるといふ所の、高級な人間だといふ、自ら從來の人間と異つて居る。それを離れて居れば、どんなに學問知識があつても、つまりは自我生活の範圍で、さういふことは極めて卑い。それがそのまま發達して居ればそこに執着を生み、その執着が利害の衝突と

なり、それが遂に戦争とか何とかいふ風になり、年百年中互に謗つたり、怨んだり、喧嘩したりしてゐる。即ち佛教でいふと煩惱の交換である。

かの世界大戦といつても、正義の爲に戦つたといふ看板つきで何百萬とか何千萬とかいふ人間を殺して、後にドツサリ借財を残して、さうして國家思想が混亂したが、それから後は誠に具合が悪くなつてしまつた。それでカイゼルは世界中を攪亂して誠に相すまんから腹でも切るかと思つたら——不運にして敗走したのは遺憾である。併し乍ら俺も男だからと鐵砲腹でも打つて見せるかと思ひの外、大勢の人を殺したま、自分は戦争が濟んでしまふと、オランダのアメロンゲンに逃げて、細君を挿して居るといふ誠に滑稽な状態になつて居る。さうしてフランスは、ドイツのアルサスローレンを、取つたとか取り返すとか、そんなことをやつてゐるが、やつて見たところが安心がならない、何時また攻められるか判らんから常に寢刃を研がねばならない。負けたり、勝つたり、取られたり取つたりといふ様な事を年中やつて居る。バルカンがど

うしたとか斯うしたとか「嗚呼ヨーロッパは遂に平和なきの國なり」といふ悲鳴を擧げるに至つた。その「嗚呼ヨーロッパは遂に平和なきの國なり」といふ一語を案出するに、これだけの大手數をやつた。

これはヨーロッパばかりでない。世界中概ね同じだ。その最も顯著な良い手本は支那だ。近代の支那は今あゝいふ風になつて居るが、その昔は大聖人孔子によつてその民族の思想を固めたものである。それがあの通りであるといふ事は一層悲惨が増す。それからキリスト教の文化は、キリストは「爾の敵を愛せよ」と常に愛を以て對する、「人若し右の頬を打たば左の頬をも打たせよ」、まだ一つありますからお打ちなさいといふ、その教によつて立つた。それをほとんど社會的精神としたほどの文明國と、斯う自ら誇つて居る國はどうだといへば、この愛せよどころでなく、神の子が喧嘩をしてゐる。日露戦争の時に、カイゼルはニコラスに手紙を送つて、必ず貴國の勝利である、日本は偶像を拜んで居るところの外道であるから、必ず貴國が勝利を受けると

いふ書面をやつて、その手紙の最後に、吾等は神と共に在り、だから安心だといふことを書いて居る。で、ニコラスもカイゼルも、兎に角新舊の異ひはあるけれども、信仰があるから吾等の勝利だといふ、ところがカイゼルの所謂外道の日本が勝つて、かの神の子は日本に負けた。

ところで、吾等は神と共にある所の、そのニコラスはどうだ。ナカ／＼以て神と共にあるわけに行かなくなつた。カイゼルも共にある譯でなく、たゞ一人オランダに逃げて日向ポツコして後添の細君でも捜して居るといふ様な呑氣なものである。さうしてその神の子同志は互に残虐な殺人を行つてのけた。これはキリスト教の文化も徹底しなかつたからである。キリストに罪はないか知らんが徹底しなかつた。やつぱり孔子に罪はないか知らんが、孔子もそれと同軌になつて居る。佛教の印度はどうだといふとやはり同じ事で、古ビルマは佛教を信ずるものは亡びない、彼等は鐵砲を持つて居るが、外道の彈丸は、俺達には徹らないと、南無觀世音菩薩／＼といつて居たら、

みんな撃ち殺された、その有様は悲惨の極である。佛教國であつた古の印度、五天竺統一の王たる阿育大王を生んだ佛教國の成績はその通りである。日蓮聖人は曾て『天竺に佛教なし』と云ふ事をいはれたが、先年印度のダンマバラが私の所に來たから、それを話したら驚いて、それに相違ないといふ事をいつた。

僅かに日本に傳はつた佛教は、いくらか形を残して居る。これは八宗九宗とあるけれども、その檀家といふものは、何の爲に念佛題目を唱へるか判らない、たゞ死んだ時に持つて行つて葬式して貰ふ組合見た様に思つて居る。だからあなたは何の宗旨ですかといつても、何の宗旨だか判らぬ。ぢや佛教ぢやないですかといへば、佛教は佛教だが何の宗旨だか判らぬ、お寺があるだらう菩提寺があるだらう、菩提寺はある、菩提寺があれば佛教徒である。何の宗旨だか知らんが何處其處の寺といふ、あの寺なら禪宗だ、それぢや俺の宗旨は禪宗かと、斯ういふ程度の宗徒が大部分である。これ一は何百萬あつても心細いものである。

眞宗と日蓮宗は、その中では少し骨張るやうであるが、眞宗のことはよく私は知らんが、日蓮宗に至つても情ないもので、大分前の事だが、日蓮宗の信者が大勢寄つて檀徒が太鼓を叩いてゐる。なんの催しがあるかといつたら、今度家の息子が兵隊に出るかも知らんから、懲兵除けの祈禱をして居るといふ。これは實際に聞いた事であるが、私は驚いて何といつて拜むかと聞いて見ると南無妙法蓮華經といふ。法華經を弘められた日蓮聖人は、『我れ日本の柱とならん』とも、若し我が父たりとも國の主にならざれば、その親を棄て、天子の御前に走せ參ずるのが忠の至りといはれずして孝の至りであるといはれた。『父を棄て、君に參るは忠の至り』とするから、平重盛の如く、『忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず』といふ事になる、さういふ場合にもこの徹底した教があれば一ぺんに解決がつく。

然るに、苟くも日蓮聖人の教を奉ずるといふものが、國家を護る光榮な兵役につくといふのに、お題目を以て避けるといふのは何から割出したか、お前の祖師にそんな

ものを教へたものがあるかと、よく私がいつて聞かせたら始めて徴兵除けの祈禱を廢してしまつた。それから徴兵を忌避したといふものが、私どもの話を聞いて自ら奮起して、私は斯ういふ不心得をしましたからといつて申し出たものがある。さうして早速その手續をして喜んで兵に出た。

そんな鹽梅に、身を棄て、國を護るといふ日蓮聖人の門下にも、大矛盾を來すことになつて居る。これは誠に心細い、あとはお會式だ。安眠妨害の太鼓を敲いて、「一貫三百どうでもよいテケテンツクテンツクツン」と狂ひ廻つて居る。そんな相でお題目が繁昌するといふが、あれぢや滅亡といつていい。斯の如き有様は日蓮聖人の宗旨を誤り解した結果であるから問題は別として、釋迦、孔子、キリストといふやうな大聖人が、この道を以て人を導くといふのは何れも誤りが無い、立派なものである。深い淺いはあるけれども立派な教である。であるに拘はらず結果が斯うなつて居る。何千年も経つて、その道の教はドツサリ出で、學者がタント出で、その聖典の解釋も餘す

所なく行はれて居るに拘はらず、その道の行はれざること斯のごとくである。これは個人本位として、個人から覺醒して行かうとしたからみな失敗した。それが順序であらうけれども、それは間に合はない。何故間に合はないかといふと、その道を説き盡して、その人が得心するといふまでには、——釋迦如來は一代かゝつて拵へ、孔子は三十までかゝつて考へ得て、七十まで天下を周遊したといふ、それより何百分一に足りない人間が、やはり同じ所までに行くには、先づ何百年考へなければそこまで行けない。

それに人間がダン／＼頭を使つて慾が深い、慾が深くて忙しいから、精神的にものを考へるなんていふことは、ダン／＼と出來なくなつて、さうしてそれを知るべき量は殖えて來た。學問だつて學者が一人づゝ殖えるたんびに理窟が一つづゝ殖える、こつちは消化す力がダン／＼減る。新聞だ、電話だ、ラジオだ、手紙だと、そのたんびに頭は勞れる。あの電車の動搖だけでも頭をどのくらゐ使ふか知れぬ、さうしてたゞ

残る所は世の中に神經衰弱ばかり。その神經衰弱にもつて行つて尊い事をやらうといつても出来ない。出来ないからい、教でも正味の事は噛みしめない。結構な教がドツサリあつても、お寺がいくらあつても、更に實際の力がない。これは個人本位、所謂人格本位に教を解釋するといふ要領から來たもので、その教は正しい、間違ひはないけれども組織がいけない。組織がいけないから論より證據、キリストなり、釋迦なり孔子のその教義は毫も曲つて居ないが、かくの如き混亂の状態を呈して居る。

それと基調を異にして、この道の宣傳と行ひとを創めたのは、即ち日本の國家である。これは道といふものを、議論や理窟にしないで實物とした、國家を道とした、國家の運用を道とした、その組織が道である、運用が道である。組織とは何であるか、一君萬臣の道である、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と憲法第一條にお擧げになつた、これだ。日本國家即道だ、「萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」これだけで道だ。どの國家でもさういふ國家はない、如何なる國家でも、たゞ民族人類、それ等の

集合に過ぎない。その集合は始めは部落の様なものである。そいつがダン／＼大きくなつて國家と看板を塗替へた、茲に始めて國家が出來た。出來たから何とか約束をしようといふので、これからこれまでは何處其處の領分と定め、次にその中に住んで居るもの、權利を決めて、それで人民と主權といふものを定めた、それは人間がたゞ集つて人間本位で出來た、その約束を國家といふ。

日本の國家は異ふ。日本の國家は人間の前から出來て居る、國土の前から出來て居る、即ち道だ。その道を弘めるために實際に建設したのが國家、であるから國土は道の次に撰ばれた。それから國土を撰んで主君を降し人民を降した、その人民が分擔して天上文化を地上に建設した。それが所謂天孫民族といひ、その仕事を「天業」といふ。神武天皇は「天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅ス」と、それを天業と仰しやつた。

其天の仕事、それを行ふ所の當事者として、この天孫民族が降つた。その天孫民族を束ね、道を代表するものが帝室、これに對しては三種の神器を授け、一方饒速日命

に對しては十種の寶を授けられた。この君民は先づ一致したものである。道といふ事のために一致したものである。それから日本の土地に前から住して居た民族でもそれに統合せられたものは、天孫民族につれて王化を布くといふことをなされた。それに服従しないものは誅戮せられ、服従したもののだけは統合して一つになった。種類は違つて居る、即ち高天原から天孫のお供をして來た方の民族はこれを「神別れ」といひ、それから帝室からダンク分れて來た源氏や平家、橘氏などといふ、さういふもので民間に擴大普及せられて行つたものは「皇別れ」といふ。その外に從來土着の種族で漸次王化に沾ひ天孫種族と同化したもの、または支那から歸化したもの、或は朝鮮や韃靼から歸化したものは、それを「蕃別れ」といふ。

この三種の人民が、みな自然に天上文化に歸入してしまつて、王化に服従したから統合せられて、みな純天孫民族になつた。これが天業を負擔すべきところの國民である。その天業を負擔するところの國民を、統合するお方が天子である。道の標準は

一つである。これが日本の「王道」だ。支那でもこの「王道」といふのは、明德の人が天に代つて治民するといふ、堯舜の如きはさうである。堯は天子の位を、子の商均は不徳だからこれに譲らぬといつて、徳の高い舜といふ人に、自分の娘をめあはせて位を譲つた。即ち舜といふ人は、天に代つて民心を治めるだけの徳があつたからである。そんな鹽梅に、舜も自分の子の丹朱に譲らないで禹に譲つた、これは徳を本位にする。そこで、利害關係に力を以て壓迫せんとする所のものを「霸道」といひ、さうでなくて専ら徳を以て立つのを「王道」といふ。恰度孔子の説いたものと孟子の説いたものがさうである。孟子に對して惠王が「叟、千里を遠しとせずして來る亦將に吾國を利する有らんとするか」といつた。すると孟子は惠王に向つて、それは怪しからん事である。私はそんなことで來たのではありませぬ。「王何ぞ必ずしも利と曰はん亦仁義有るのみ」國の利益のために來たのでない、仁義のために苦心して居るのである。仁義のために孟子を用ゐるといふならこの國にお手傳ひしようといふ、所謂「王

道」である。けれども儒教でいふところの「道」に對して『大道廢れて仁義起る』、『名
 の名とすべきは實の名に非ず、道の道とすべきは常の道に非ず』、『無爲にして行はれ
 る』といふ。智を受けていろんな技巧を弄したものは本當の道でない、天然自然なる
 ものが道であるなど、老子はいつて居る。けれども老子はどれがその『無爲の道』で
 あるといふことはいはない。

ところが日本の「王道」といふものは、さういふ有名に對する無名といふやうな、
 相對的のものでない、絶對的である。また徳があるからあの人を王にしようといふや
 うなものではない。天然自然に道といふものがあつて、その道を行ふところの、ほと
 んど本能的にこれが行はれたもの、それが「王道」だ、だから支那の「王道」も王道
 でないことはないが「王道」としてはむしろ常道でない、相對だ。だから私はこれに
 は「後天的王道」といふ名をつけた。日本の「王道」は、天照大神のお心をそのま
 ま傳へて、ソックリ人間の上に傳へるために、國家といふ組織に建設した。であるか

ら 天皇陛下が國體といふだけではない、天皇陛下と人民と一致した、いふにいは
 れないものが日本國體である。此の頃日本國體といふものをいろいろ説き惱んで居る
 が、説き惱むことはない。體といふ字は、全體「のり」といふ、その國體を政體など
 、混同して、國の組織とか國柄といふほどの事に淺く考へて居るが、本當の國體とい
 ふものは、さういふ手軽なものではない。國體の體の字は、體の字は禮に訓ず、禮は
 法なり」といつて、即ち法則だ。法といふのは、ふみ行くべき法、規則、それは何で
 あるかといふと神の心である、御先祖の心である。

その御先祖の心とは、どんな心であるかといふと、神武天皇により「皇祖皇考、
 慶ヲ積ミ暉ヲ重ネ、多ク年所ヲ歴タリ」と仰せられたこの「積慶重暉」が神の心であ
 る。その神の心をそのまゝ用ひる様にしたのが國家の精神、それを 神武天皇に至つ
 て、その積慶重暉の二つをば總合的實行に收束して「養正」といはれた。この「養正」、
 正を養ふといふことは「積慶重暉」で、これを調へると「養正」といふことになる。

この「皇祖皇考、慶ヲ積ミ暉ヲ重ネ、多ク年所ヲ歴タリ」とは、即ち永い年代を歴て以て朕の代に及んで来たといふ。一朝一夕の思ひつきではない、代々やつて来た、國家不拔の道理、萬世不變の道としてやつて来た。だから「積み重ねる」といはれた。

この「慶」とか「暉」とかいふことは何處でもいふ。孔子でも慶は仁の徳、暉は智の徳、正は勇の徳として、これは「智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず」とこの三つがある。けれどもその「積む」といふ機關がない、「重ねる」といふ機關がない、「養ふ」といふ機關がない。それは國家といふ組織にしなければ、これを實行することが出来ない。實行のために國家といふものを組織した。その組織は一君萬民の組織だ。君は上にあつて、萬民がこれに一致して居る形だ、「君中に民あり、民中に君あり」といふ、これは何處にもない。

「民は知らしむべからず依らしむべし」と、民と君と分れて居たむかしの支那の君民關係では、民は憐むべきものである、よつてこれを天に代つて救つてやるべきであると

いふ。これは相對的であるが、日本の君民關係はそれと違つて居る。日本のは眞理に服従すべきものであるといふ。それを離れて、たゞ目前のことだけで、生存を行つて居るから、小さなものでは、あの村だとかこの里だとかで、年中衝突がある。大きくいへば國だ。各々國と國との間に利害の關係が異つて居る。異つて居るが故に常に争ひが潜伏して居る。その平和といふも根柢から來て居る眞の平和でない、争ひが止んでゐる間の平和だ、争ひを休業してゐる中の平和だ、危険なものである。

干戈を以て争はない中は、思想の争だとか、經濟の争が年中あつて根柢がふらついてゐる、根柢の基礎が立つて居らぬ。それを眞に平和ならしむるには、同標準を示して、人類の總てを之に依らしめなければならぬ、夫が道だ。その道を言葉で説き理窟で行くと、理窟といふものは最後まで行つて總勘定してしまはなければ整理が出来ない。百圓の錢勘定にたつた一錢違つても勘定は合はない。眞理だの何んだのといつても、人間が百年経ても考へきれない、考へきれないからいゝ加減にする。その

いゝ加減にするといふ事から、何處かに齟齬が出て来て、いゝつもりで居たのが徹底を缺いて、理窟は理窟の中から迷ひを生じ、學問は學問の中から迷ひを生ずる。信仰だの何だのといつても、それは最後の決着がないから駄目である、大聖人が百人千人出ても決着がつかない。

今までも澤山の聖人賢人が出て、義とか仁とかいふ道を説いて居るけれども、それを組織的に事實の上に「道」を以て民を養成する道がついて居ない。であるから日本の國家は世界を救済するために建てられ、天照大神は所謂「先天の王道」を布いて、これを教へるのに理窟にしないで、仕事にせられた。だから「積む」とか「重ねる」とか「養ふ」とかいふことは仕事である。その仕事は國家だ、國家は一致して有機的に働く状態である。明治天皇は

「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ變ラヌ之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセ

ンコトヲ庶幾フ

と仰せられた。その道といふのは國體だ、其國體は 天皇も人民も俱に拳々服膺しなければならぬ。その最後の決着は、みなその徳を一にする、國體の中に於て一致する。であるから根本に約して君民一體、仕事に約して君民一致だ。

ところが 神武天皇によつて建創された日本それ自らが 神武天皇を忘れてゐた。『天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅ス』『六合ヲ兼テ以テ都ヲ開キ八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サム』といふ、この道を以て世界を一軒の家とするといふ偉大なる『人類同善四海一家』の大鼎を 明治天皇の御出ましになるまで一向自覺しなかつた。日本の堂々たるこの歴史に、火を見るよりも炳かなる「日本書紀」の傳へにさへも、全然國學者なども氣がつかないで、たゞ英傑であるといふ様に月並に考へて居つた。その 神武天皇を反省しなかつたといふ證據は、維新の前まで 神武天皇の御陵が何處にあるかさへも判らなかつた事によつても知れる。従來の國民も爲政治家も、吾身の幸福をのみ念とする事

ために、國家の大恩人を忘れ、國家の基本を忘れて居つた結果は、かくの如く御陵さへも知れなかつたといふ證據を生んだのである。代々の武家政治もさうだ、また迦つては藤原氏もさうだ。藤原氏は自分の先祖大織冠鎌足はあんな風に多武峰に祀り、徳川家が家康を祀るには日光の如き、あゝいふ立派な世界に耀くべき所の大建築を以てして居る。これも悪くない、これは自分の先祖だから立派に祀るのは結構だ。しかし先祖を祀ることがそれほど大切であると知つて居るなら、藤原氏も朝廷にある學者も、日本の大先祖である 神武天皇の御陵が、何處にあるかさへ知らずに放つて置くといふことはない筈だ。徳川幕府は幕末に際して、山陵學者が進言した爲に棄て置かれないとして、僅かにその修築をしたといふ状態である。

曾て柴野栗山が、神武天皇の御陵を何處だらうと行つて探したが判らない、その邊を見ると百姓が田を耕して居るから尋ねて見た。さうすると、この先に「神武田」といふのがあつて、殊によるとそれだんべいといふ。やつて來て見ると田の真中に小

さい丘があつて、一本の松が枯れかゝつて居る。定めしそれであらうと、栗山は慨然として「遺陵才に里民に向つて求む、半死の孤松數畝の丘」といふ詩を作つた、それは幕末の頃である。それから蒲生君平だとか藤田東湖だとか、戸田、成島等の二三の學者が棄て置けないからといふので幕府に建白したから、ホンの申譯に、方々の御陵を、僅か一萬何千兩とかかけて修築したといふ。マア他の御陵はしばらく措くとしてこの國の御先祖 神武天皇の御陵を、何處にあるかさへも究めなかつた、究めようともしなかつた。日光廟や多武峰を崇ふといふことを知つて居る爲政者が、國の根源たる 神武天皇を忘れて居た。その根源を忘れるといふことは、即ち、日本國體の何たることを覺醒し得なかつた原因だ。その御陵さへも氣がつかないで居るといふくらゐだから、神武天皇の御主張を知らなかつたのも無理はない、日本は永い間夫を忘れて居た。

それが 明治天皇によつて、始めて日本を知つた。といふものは 明治天皇は徳川

慶喜の大政奉還によつて、王政復古を仰せ出された時、大化の革新等を飛び越えて、イキナリ 神武天皇の古に還り 神武の經綸を以てせられた。さうして歴代未だ曾てなかつた大神宮に自らも参りになつた。曾てこの國の祖廟たる 天照大神を、朝廷が行幸御親祭なさらないで加茂や石清水にのみ御歸依厚かつた、この事が日本の衰へた所以だと日蓮聖人は深く世を教訓せられた。これを北畠親房や、水戸の光圀、頼山陽等の人から聞かずに、沙門日蓮の口から聞かすといふことは、餘程政治家も歴史家も迂濶であつたといはねばならぬ。然るに 明治天皇は日蓮聖人の書によつて自覺せられたのではない、即ち國體精神の活現たる大聖人として御出現になつた譯であります。王政復古は 神武天皇の古に還り、日本の全體を 神武天皇の思召の通りにする、神武天皇御創業の御精神によつて治めて行くといふ御心である。さうして世界的日本の國體を御宣明になり、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と仰せられた。これは實に世界を動かす御一言だ、世界中が震へる程の御一言である。

如何とならば萬世一系の天皇が日本の外に何處にある。この人間の世に萬世一系の天皇といふ事實があり得るか、果してあつたか、あつたとすれば何處だ、これは人類の文明を解決する最も大きい課題である。それがあつたとすれば一遍に夜が明ける。その『萬世一系の天皇之を統治す』るのは日本だといふことによつて、始めて日本が世界の問題になる。世界の人があらゆる事は後にして残らず日本の研究をしなければならぬ。國際聯盟だとか、軍縮會議だとかいくらやつても、積んでは壊し積んでは壊してゐる、賽の河原の地藏さんと同じで、その根本を解決しなければなんにもならぬ。そこで私は明治神宮御遷座の時に、マルクスの共産黨の宣言に對抗するつもりで『世界を擧げて日本國體を研究せよ』といふ宣言書を發表した。それは伊語、英語、佛語、獨逸語に譯して、方々の國々の政治家や學者に送つてある。まだ完全な批評も反響も餘りないが、その中に一つ、獨逸のある社會主義の學者のメーブスといふ人がこれに批評を加へて、社會黨の中央機關新聞の「フオールヴェルツ」(前衛)に掲載し

たのを見ると、吾々のマルクス主義は、物質より出發して物質に還る、然るに田中氏のいふ日本國體といふものは精神より出發して精神に還る、これは大變に思想が違つて居る。違つて居るが特に注意すべきことは、日本の國體はその間に物質と提携して精神と物質を融合する、これは吾々の大いに注目すべきところであるといふ。さうして神武天皇の絶對平和を論じた條項に、神武天皇の「鋒刃の威をからずして天下を平げん」といふお勅語を引いてある。即ち刃に舐らずして天下を平げるのが朕の本領であるとして仰せられてゐる。然るに神武天皇は「歴ノ神」と申上げた程の武勇絶倫の御方である。それに拘らず絶對平和を精神とせられ、正義のために膺懲するところの武は用ひるけれども、其他の武は用ひないといふ、それで後に諡名して神武天皇と申上げる。其御精神は絶對平和である。其「鋒刃の威をからずして天下を平げん」といふ御勅語を引いて書いた。

ところがその神武天皇の勅語だけは非常に注意したものと見えて、それだけは特

に大きな活字で載せてある。日本の新聞などは曾てさういふ眞面目な事に對しては、何等注意も敬意も拂はない。けれども、どことかの女優が誰とかと逃げたとか、どことかの藝者が子を生んでどうしたとかいふ様な事件は最大級の大きな活字を使つてさうして寫眞まで入れる。或は少し珍しい泥棒が捕まると高い金をかけて追駈て行つて、汽車の中で一緒になつて、泥棒を拜み倒して名前なんぞ書かせ、なんとか小僧の直筆など、麗々しく掲げる。そんな馬鹿々々しい事に金を使つて居るが、かういふ眞面目な事に對しては一顧も拂はない。其中に正反對の社會主義の學者、而もマルクス學系を引いたものが、かくの如き批評をしたといふことは、どうしても西洋人が一枚上手だか知らんと思ふ。却つて御膝元の日本人自らが、この國體の尊貴であることを知らぬといふことは、實に慨くべきことである。

私は曾て清浦さんが總理大臣當時に、思想善導だとか、民心作興だとか、いくら叫んでも駄目だから、その根本たる國體學の講座を帝國大學に開きなさいといつたが、

おぢいさんはウンとかなんとかいつたが、今にそのまゝになつて居る。それから東京府知事の宇佐美君が、何か書物と興してくれといふので、三百人分「日本の建國」といふ本を寄附したこともある。

然るに今以てこの國體といふものは、斯ういふ深遠なものであるといふことを願みないといふことは残念な事である。併しこれは再び考へて見ればこれでよかつたか知らぬ。これからだ、明治天皇によつて啓發せられ、明治天皇の教訓によつて眞に目覺めた譯であるが、これまでは目覺めて見た所で、世界的に發揚は出來ないから、時期を待つた、世界的に旗を振れないから時を待つたのだ。世界といふものを豫想しないではどうすることも出來ない。二千五百年の古 神武天皇は仰せられてある、「六合ヲ兼テ以テ都ヲ開キ八紘ヲ掩フテ宇ト爲サム」と、これが互に相凌轢するといふことは、人間の平和を得ない所以だ。こいつを除かなければならない。これを除くには公明正大にして明確な主義といふものゝ光が結晶して國家となつたものがなければ

ならない。

その國家の道の實行さへ弘めて行けば、世界は自然に救はれる、これが日本の「先天の王道」である。「後天の王道」といふものは今の人民といふものを、どうかして救つてやりたいといふところから出來た。「先天の王道」は人民より大きい國である。君民一體である、君民一道である、君民一致である。日本の國體といふものは先天の民と先天の君を含んで居る。國體を説けば 天照大神の御心持であるから、國體即道である。その道は 天照大神の御心であり、天照大神の御心は即先天の道である。そこでこれを一具して宜しきに從つて文武の政治をとる、即ちこれが「先天の王道」である。日本の高級の文化といふのはこれだ。

日本には高級の文化がないといふことを學者がいふが、さういふ事をいふものは、自らの空虚を現はすもので、甚だ慨かほしいことである。日本國體の精神は、「先天の王道」を布く事である。王といふのは、日蓮聖人の解釋によると、天地人の三才を一

おぢいさんはウンとかなんとかいつたが、今にそのままになつて居る。それから東京府知事の宇佐美君が、何か書物を與してくれといふので、三百人分「日本の建國」といふ本を寄附したこともある。

然るに今以てこの國體といふものは、斯ういふ深遠なものであるといふことを顧みないといふことは残念な事である。併しこれは再び考へて見ればこれでよかつたか知らぬ。これからだ、明治天皇によつて啓發せられ、明治天皇の教訓によつて眞に目覺めた譯であるが、これまでは目覺めて見た所で、世界的に發揚は出來ないから、時期を待つた、世界的に旗を振れないから時を待つたのだ。世界といふものを豫想しないではどうすることも出來ない。二千五百年の古神武天皇は仰せられてある、「六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ八紘ヲ掩フテ宇ト爲サム」と、これが互に相凌轢するといふことは、人間の平和を得ない所以だ。こいつを除かなければならない。これを除くには公明正大にして明確な主義といふものゝ光が結晶して國家となつたものがなければ

ならない。

その國家の道の實行さへ弘めて行けば、世界は自然に救はれる、これが日本の「先天の王道」である。「後天の王道」といふものは今の人民といふものを、どうかして救つてやりたいといふところから出來た。「先天の王道」は人民より大きい國である。君民一體である、君民一道である、君民一致である。日本の國體といふものは先天の民と先天の君を含んで居る。國體を説けば、天照大神の御心持であるから、國體即道である。その道は、天照大神の御心であり、天照大神の御心は即先天の道である。そこでこれを一具して宜しきに從つて文武の政治をとる、即ちこれが「先天の王道」である。日本の高級の文化といふのはこれだ。

日本には高級の文化がないといふことを學者がいふが、さういふ事をいふものは、自らの空虚を現はすもので、甚だ慨かましいことである。日本國體の精神は「先天の王道」を布く事である。王といふのは、日蓮聖人の解釋によると、天地人の三才を一

貫する事であるといふ。(ポールドに向ひ)この王の上の一は天である、下の一は地である、真中にある一が人である、すなはち天は靈だ、地上は物質的な國土だ。その天の恵みを受け、地の上に立つて居る真中が人だ。この天を代表するものは神だから、神から下つて来て、かういふ風に、人と國との真中を縦に貫ぬくもの、これを王といふ(王の字を書き了る)この形が王だ。さうすると天地の真中に人があり、この縦のーが神の代表者たる國王である。このーで一切のものが完全に握手した状態である。之は「君民一體」の形である。即ち 神武天皇建國の八太主義の神人一如、絶對平和といふこともこれから来て居る。人民と 天皇と一體の關係は「先天の王道」でなければならぬ。後天的の王道は人民を憐れんでどうかしてやるといふ相對的のものである、隔歴の思想が本體である。然るに日本の君民は「義は君臣にして情は父子」といふ、切つても切れない關係にある。それが眞の「王道」だ。この意味に於て日本の文化は世界を救済する唯一のものである。

その最初の開拓者は 天照大神であらせられる、夫が 神武天皇によつて成立し聖徳太子によつて祖述され、 明治天皇によつて體現された。この間二千五百年、これ幕が開いた。その幕の間が二千五百年相經ち申候で、その幕が開いたのは時運に乗じて世界を救ふべき時が來たのである、これから日本の出直しである。そこで今明治會を興して、この 明治天皇の偉大なる教訓の下に國民を寄せなければならぬといふ運動をして居る、明治會を通じて 明治天皇を敬ふといふ。 明治天皇の教訓に聚るといふことは 今上天皇 大正天皇の御教である。 明治天皇の御教は 天照大神 神武天皇、代々の 天皇のあらゆる長所を具備せられた御教であるから、その御徳を世界的に弘め、同時に眞の日本國體の主義を顯すといふ、斯ういふ主義から吾々は明治會の發展に努力して居る次第であります。

神武の國

(大正十四年三月二十七日軍事教育講習會にて)

畑少將(現大將)から手紙がありまして、この講習會に来て一席の話をするやうにといふ事でありました。御趣意を承りましたところが、今回開かれまする我國に於て初めての軍事教育に派遣せらるゝところの、選拔された將校諸君のその準備講習であるといふ事を承りました。私は喜んだのであります。それはどういふ譯かといふと、一體この軍事教育を一般學校で加へるといふことは私が明治二十八年以來の宿論であります。而已ならず原則としては、學校に軍事教育の一科を置くといふよりは、有らゆる中等學校若しくは小學校も幾分その準則に依ることとして、全體學校は軍隊組織であるべきものだといふことが、私の主張であります。それからもう

一面には、國家の全體に向つては、舉國武裝すべきものであるといふことを、常に主張して居りましたのであります。その自分の主張の一部が今日いまの政府によつて實現せらるゝことは、實に我皇國の幸であります。さういふわけで甚だ自分の意を得た催しに對しまして一席の話をいたして諸君の清聽を汚すことは、最も自分の光榮とし満足とする所でありませぬ。

そこで今日咄嗟のことでありませぬから、差當り自分の常に考へて居りまする武育といふことに就きまして、其根源の理由を私の専攻して居る日本國體學の上から少々お話をしたい。「神武の國」といふ題、これをジジムの國と讀んでもかまひませぬ。即ち神武天皇のつくられた國であつて 神武天皇といふ方は神武の徳があられたから神武と諡をせられたのであります。「名は體を證はす」で、この國祖が 神武天皇であるといふことは、即ち神武の制定であつて、それを思想議論ばかりでなく諸政の上には現はされた。即ち 神武天皇の信念が實現せられたのが日本の國家であるといふ所か

ら、この國を 神武天皇の國即ち神武の國と解してかまはぬ。しかし今日のこの題の意は、神聖なる武といふ意味に重きを置いてあります。其要領としまして、日本の建國といふものは偶然にたゞ民族の發展によつて出來たといふことでなくして、國家の形式を具へる前に、理想の國家といふものが既にあつて、その理想の國家を建設せられたのが、日本の國家の創建であるといふことが、一般の國家の例と違つて居るのであります。

すべて西洋の國家といふことの觀念を持つて來て、それを思想學問の標準として日本の國家を論ずるといふことは、所謂杓子定規であつて算當が違ふ。さういふ違ふ算當から一切の事をやるからすべてみな今日の思想の混亂を招いたり、或は政治經濟の混亂を招くやうな事が來つたので、これを要するに、即ち國體の自覺といふものに遠ざかつた、これはすべての祟りである。であるから日本の國家を向上せしめるとか改善するとかいふことの第一の標準は、先づ以て日本の國家、即ち日本の國體を自覺す

る事から出發しなければならぬ。これが私の主張であります。そこで只今短少の時間にて國體學の命ずるところの總てを盡すことは出来ませぬ。即ちこの命題に基いて武といふ話から一つして参ります。

武といふものは文に對抗するものであると考へて居ると違ふ。武が文を生むのである。文武はその根本に於て一體であるといふことが、日本の國體論である。併しなから武の中に文があるのか文の中に武があるのかといふことについては、我が日本國は武といふものの中に含まれた文、即ち武から生み出した文でなければ、眞の文化でないといふのが日本の建國の趣意である。ところで世間の人の武といふ事は、たゞ武斷或は軍國主義とかいふことになる。そこで現今ではこの武といふことを忌む、甚だしきに至つては軍閥を憎むといふことのために軍事行動までも彼是非難をする。別して軍事教育に就て反對をする人が大分ある。

私は今山の中に引込んで居るので新聞や雜誌で見ると、この間所謂憲政の神とかい

ふ尾崎君が何處かでやつた演説に、軍事教育に反對をする演説中に、學校は人々互に相扶くる道を學ぶ所である。それに人殺しの教育をする必要はない。斯ういふことを言つて大層反對をしたといふことがありました。新聞記事が違つて居れば責任は新聞にあるので、その通りであるとすれば、此尾崎といふ人は軍事といふことの根本を誤解してゐる。事の序であるからこれも籠めて話さうと思ふ。それからもう一つは大山郁夫といふ人がこれは社會主義側の人で、非常な軍事教育の反對者である。

その理由を聞いて見ると、學校で軍事教育をするといふことは、第一先づ教育の獨立を阻止するからいけない。それからもう一つは、軍國主義の色彩を濃厚にする虞があるからいけない。もう一つは教育上學問的研究の自由を妨害する。軍隊といふものは規律でやるもの、一つの型に箱めて絶對服従であるものだからそれを學校で用ひたら學校の自由研究といふ自由を殺ぐ。それからその自由研究によつて人間の創造能力といふものは進む、その能力を塞いでしまふ。斯ういふ害があるからいけないといふ

ことを論じた。それが先づ大山君の反對の理由である。それは社會主義者は社會主義者の見どころがあつて、年中さういふ事を言つてゐるのですが、しかしこの軍事教育といふものはさういふ淺薄な理由によつて輕視せらるゝものでないといふ事だけは、吾々の立場としてこれを一遍話して置かなければならぬ。さういふ事柄を籠めて、國體主義を經とし、これ等の議論を緯として一寸申上げて置きます。一體武といふことは、思想にある眞理とか正義とかいふことを、事實に行ふ場合に入用な力を申すのであります。尤も軍人諸君に武の講釋をするのは、釋迦に説法をするやうなものだが、私共の方の考はさうだ。正義といふものが觀念思想の上にはかりあつても、之を事實に行ふ、即ち物の上に移して物といふ力を附與して、その所謂理想の眞實性を實現するといふ機關がなかつたならば、たゞ考へる事だけは正しく考へ、守る事だけは正しく守つたけれども、これを實際に現はすことが出來ぬといふことになる。

世界萬邦を通じてあらゆる聖人賢人が種々様々に苦心して、世を教へようとか導かうとかして眞理を説き眞理を談じて居る事は、佛教でも基督教でも儒教でもなか／＼骨を折つてやつて居る。併しながらその教が天下に瀾漫して幾千年の久しきを経て、その効果はだん／＼退歩して、その道の賢者達人は追々とどつさり出て、それが發明せられ高調せられた書物のやうなものも段々殖えて、殆ど蟻の這ひ出る隙間がないほど包圍攻撃して居る。それであるに拘らず世の中はだん／＼悪くなる。これは何であるかといふと、その所謂眞理なり正義なりを物質の上に移した斷行の力といふものを缺いて居るからである。これを物の上に移してその正義を斷行するところの力を設定したといふことが、古今東西の歴史に於て萬邦を通じて日本の外はない。であるから日本の國體といふものの道は別に異つた道ではない。人間の履み行ふべき眞理公道はいづれの聖人も『先聖後聖皆その揆一なり』で、これは別段に異つた眞理といふものが日本にあるわけではない。日本の國體の特色は、それを實際の上に移して一つの斷

行力といふものを造る爲に、眞理正道そのものを國家といふ組織にしたといふ所に違ひがある。それが日本の國體の尊いところ、それが日本の武である。であるから、その武といふものは、即ち眞理正道を事實の上に、物の上に力として現はすといふ其機關たる國家そのものが武である。既にその中に含まれて居る國民なり、また之を統轄遊すところの帝室御自身、即ち武の權化である。たゞこれを世間の人が軍國主義とか何とかいふやうな頭から考へると、それではどうも、所謂好戰國だといふヨーロッパ人が日本人を忌避するところに落ちはしないかといふ懸念がある。軍國主義などいふことを、大層遠慮勝に悪いことでもすることのやうに思つて居る人間があるけれども、其は軍國主義そのものゝ意義が悪い。それ等の武といふものが違つて居る武だからいけない。日本國體の要する武であるならば、堂々瀟歩して日本は軍國主義であるといふ事が立派に云へなければならぬ。それ等はみな國體自覺を失つて居る證據だ。そこで 神武天皇が武徳旺盛の帝であらせられたに拘らず、御一生を通じて武を以

て經とし、文を以て緯とせられたことは、御一代の事蹟に於て明かである。或る學者が日本には固有の文化がないといふことを公言したけれども、併しながら今を去ること二千五百年の昔に於て、他の國が隣々として居る間に、日本には文武整備の組織が行はれ、孔子の教もまだ見ない釋迦の教もまだ來ない前から、立派な徳教が行はれて居つた。實際だ、議論ではない。神武天皇様が雜誌を書かれたり著述を遺して教へられたので何でもない、事實に行つて教へられたのだ。それで私は 神武天皇の實行には八つの觀察すべきものがあるからこれを八大主義とした。その中には「絶對平和の主義」も「開發進取の主義」もみな含まれて居る。些末な事のやうであるけれども、藝術の方面でも 神武天皇の御事蹟に於ては、立派に文明國たることを證すべき、眞理と契合した純正なる藝術を持つて居られる。戦がある度に久米歌をお作りになる、久米部をして久米舞を舞はしめる。戦が済んで凱旋のときには、必ず久米歌をお作りになつて久米舞を舞はせられた。將士と共に三軍と共に幸福を願つといふ程一點間然

する所のない政治が行はれて居る。

今現に傳はつて居る久米歌は、その當時のもので、その節はその當時のものでないか知れませぬが、歌は神武天皇のお歌で宮中に於て再興せられたものだ。私共は毎年紀元節には久米舞を奏します。民間で久米舞をやるのは私共ばかり、如何にも勇壯な平安朝時代に再興したかと思ふやうなものもありますが、それでも昔の倂が幾らか残つて居る。その中に、歌がなくてたゞ沈黙の間に、戈を抜いて四海を平定するやうな形をする舞振りなどの如きは、實に立派なものである。さういふ優秀な藝術までも持つて居つた。むしろ今の日本は、文化が退歩したといつてよい位だ。それを固有の文化がないなどいふことをば、公然といつて、文化といへば西洋の眞似をしなければならぬやうに考へて居る。みな日本自らの國の相も知らず、國の性質も知らぬ、國の本體も知らぬ、所謂自國を忘れた結果かういふことになつた。さうして西洋人が日本の武勇を猜んで軍備の縮小でも講ずると、その尻馬に乗つていゝ氣になつて騙さ

れるのも知らないで、ワイ／＼やつて自分と陥る奔を造らうといふ様な、憐れはかなき今日の思想學問政治の状態である。この中に切めても國體の意義恢復の端緒として軍事教育の起つたといふことは、恐らくはこの點から、日本の眞の國命が復活して來るかと思は喜ぶ。

であるから、この軍事教育にこれから聘ばれる諸君は、この病める日本を回復するところの重大な任務がある。この學者よりも、坊さんよりも、政治家よりも立派な重大な任務を負うて居られる方々と思ふから是非此魂を一つ教育していただきたい。それは戦術とか兵式體操とかといふことは知らぬ、それは専門家のおやりになる事であつて如才なくおやりになるだらうが、その魂が入つて居らぬといけない。其魂を入れる根本條件として、この軍事教育が必要であるのだ。此軍事が實現すれば、即ち武である。其武が文と離れて特殊なものとなつた、そして武は單に國防のために入用であるとなつた。だから尾崎君のいふ如く、人殺し機械を造つて置くのだといふ考

へてはいかぬ。これは國民の正義を鼓舞し、國家の正義を守り、眞の日本國民の使命を果す處の一番中堅の仕事である。これから發生して來た文化でなければ眞個の文化でない。文事あるもの必ず武備ありといつたけれども、日本の武は一切の文事のすべての光輝を此中から發すべき處の光の源である。

神武天皇の建國の三綱が第一には慶を積む、第二には暉を重ね、第三には正を養ふ。慶を積むといふ事は之は道德の方面「徳ヲ樹ツルコト深厚」と 明治天皇は仰せられた、それだ。第二にお舉げになつた暉を重ねるといふことは、これは今の言葉でいへば文化、知識の方面だ。それから即位の時にこれを綜合して、後世子孫に傳へ國家の將來に向つて宣言なされた言葉が養正だ。正をやしなふ。この正といふことが即ち正義だ。實行力が伴つて居らなければならぬこれは武である。積慶といふ事は道德である、重暉といふことは知識である、養正といふことは正義である。この正義は即ち何に屬する。文武の中何れに屬するかといへばこれは武である。それだか

ら三種の神器でいへば劍になるのだ。天照大神は別に説明はなさらぬ、なさらぬけれども説明以上の大雄辯、日本の國體の三綱を三種の神器を以て授けになつた。鏡はものを照らす、璽は温順の徳を表する、劍はものを斷つ、この劍と璽と鏡といふ器にすれば、どんな馬鹿だつても、劍を見れば物を斬ることを思ひ、鏡を見れば物を映すことを思ふ。鏡を鋸のかはりに使ふものはない。器といふものは欺くべからざる一つの使命を表徴して居る。教や思想といふものは、さうでもない斯うでもない大晦日まで行かなければ勘定の付かぬものだが、器ばかりは一刀兩斷に明かに鮮明に意義を現して居る。之を器械といふ、器の教だ。佛教では形益といふ。形を以て道を説く。それが 神武天皇建國の初めに當つて此の三種の神器の意味を宣言なされて、積慶、重暉、養正といふ三大綱をお舉げになつた。かういふ三大綱の爲に建てられた日本國である。民族が集まつて人間が殖えたからその國體を國家と名付けたといふ様なさういふ掃溜に蟲のわいた様な國家と、日本の國家とは違ふ。然るに日本人が之を知

らぬといふ事は慨歎に堪へぬ所でありませう。

外國に例があらうとなからうと、外國に例がなければ彼等は救はれる國だ。こちらには救ふ國だ。病人と醫者見た様なものだ、醫者が何も病人の眞似をする必要はない。外國にさういふ國家がなければ、これは國家が病める證據で、人類六千年の歴史に於て何もものを遺したかといへば、戰鬪攻伐、利害の競争、たゞ食を漁り利權を漁り合ふといふことだけで、其間に興廢起伏したのが他の國の歴史である。さういふ憐れな情ない國家、情ない社會にして置くといふことが如何にも歎かましい事であるといふ所から始まつて、天照大神は特に日本を擇んで、その道を世界に建てる皇統を降し、三種の神器をお遣はしになつた。『是レ吾カ子孫ノ王タル可キノ地ナリ、宜シク爾皇孫就テ治ラスヘシ、行ケヤ寶祚ノ隆ヘマサンコト、當ニ天壤ト窮リ無カルヘシ』此天壤無窮といふのは、唯自分の子孫が永久に繁昌するやうにといふ事ではない。それは匹夫匹婦が迷信的に神佛を信奉して『家内安全商賣繁昌子孫長久、後生大事に金欲し

や、死んでも命のあるやうに』と祈るのと同じことだ。それは迷信だ。天照大神がいはれたのはそんな事ではない。天地と共に、窮まりないといふものは、宇宙に何がある。山でも河でも人間でも窮まりないものは一つもない、みな窮まりがある。昨日まで壯麗の都市であつた東京も、前年のたつた一瞬の地震で以て、見る影もなくなつてしまつて居る。世界は何時どんな變化があるかも知れない。桑田變じて海となるといふことは事實の原則だ。併しながら山が顛倒へつて河にならうが、人間が無くならうが、永久に易りなく存して居るものは道である。是れ即ち、天地と俱に盡きないものである。寶祚の天壤無窮であるといふことは、寶祚の内容は道であるといふことを言はれたのだ。若しこの寶祚が道と伴はないものである、道の實行機關でも何でもない、けれどもたゞ希望として、天壤無窮とわざと仰しやつたといふならば、それは秦の始皇が『朕を始皇となし二世三世より萬世に傳へん』などいふ世迷言をいつたのと同じことになる。そんなことで出來た日本國體ではない。それだから、その人

皇の代となつて今度は 神武天皇が 大神の神勅を承けられて、
 上ハ則チ乾靈國ヲ授ケタマフノ徳ニ答ヘ下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ、然ル後、
 六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サムコト亦可カラズ乎
 とかう仰せられた。上は 天神が此國を皇孫に授けられた、何のために授けられた、
 子孫繁榮のために授けられたのではない。

皇祖皇考乃チ神乃チ聖ニシテ、慶ヲ積ミ暉ヲ重ネ、多ク年所ヲ歴タリ
 これは世の中の擾亂の有様を見てこれを救ふためにこの正道を人類の上に立てようと
 いふ大御心だ。であるからこれを天業といふ。私共の出して居る新聞を天業民報とい
 ふ。天業といふ字は未だ曾て見たことはない。天虎とか天安とかいふのは天麩羅屋だ
 けれども、天業といふのは見たことはないと考へるものもあらうが、神武天皇が宇
 宙に響渡るほどの大きな聲で宣べられたのが、此の天業の二字だ。それが日本人の耳
 に二千五百年の間届かずにゐたといふほど日本人は患つてゐた。何もちつとも珍しい

ことはない。吾輩が發明したのではない。神武天皇は、「天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅セ
 シ」といはれた。天業は天の仕事だ。天の仕事といふのはこの神が世の中を救はうと
 いふ、この偉大なる功績を人間界に樹てるといふことに於て、仕事といふ字が起る。
 仕事には場所が要る、場所なしでは出来ない。根據地が要る。そこで根據地を擇ぶ必
 要があるから、この千五百年の瑞穂の國は是れ吾が子孫の王たる可き地なり、王道を
 布き行ふべき所であると宣はせられた。

神武天皇のうちに「乾靈國ヲ授ケタマフノ徳ニ答ヘ」と仰せられた。どう答へるか、
 「下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ」である。かうして結構な國を授けられたから、
 悠くり日向ぼつこをしてうまい物でも食つて永久にこの幸福安寧を享受しよう、そん
 な各つたれた考は日本のものでない。その徳に答へるところの子孫の義務として、
 皇孫正を養ふ、わが子孫代々正義公道を養ふその心を弘め「然ル後六合ヲ兼ネテ以
 テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇トナス」六合八紘といふのは全世界だ。御代々の詔その

他でも「天津日の照さん限り海の汐の届かん極み」などいふことを始終いはれる。「延喜式」の祝詞にもある。世界を一つにしよう。部落の最も大なるものを國家といふ、さういふ國家は一つく利害關係を異にした集團であつて、それには君主國あり共和國あり國は別々になつて居る。いくつ別になつて居つてもかまはぬ。精神が通じて居ればいい。通じないから利害の關係が違ふ。利害の關係が違ふからそこで衝突が起る。衝突が起るから年中争ひが起る、多くは下らない争ひだ。その争ひのために人間は年中不安から不安の裡に日を送つて居る。これはいつまでもこんな事をして置くといふことは出来ぬ。神の目から見れば出来ぬ事である。之を救済しようといふ、救済するには標準がなければならぬ。畢竟するに個々別々になつて相隔て居るから此隔たりの間に種々の衝突が起るのだから、其ものは變つてゐて國は幾つあつてもかまはぬから、内面に一つになる方法さへ立てば國はどつさりあればあるほど宜い。丁度人間の身體に目があつたり、鼻があつたり手があつたり足があつたり變つたものが

どつさりくつ付いて居るやうなものだ。

併しいくら人間でも鼻で物を見ることは出来ない、目で物を嗅ぐことは出来ない。各々掌るところがあるからである。又變つたものが幾らあつても宜いからといつて目が三つあつても仕様がなから、之は二つで恰度宜い、さうして、かういろく身體の道具立があるけれども、之を一貫する精神といふもの、神經を傳はつてこれを統轄するところの精神が茲にあつて、其精神が統轄して耳目のくその職責を異にして居る。しかし貢獻する所以の道は、身體といふもの、中樞に來つて、我身體に宜かしかしとみな働いて居るからそれで保つて居る。それが目や鼻が年中喧嘩して足が二本あつて、右の足はこつちに行かう、左の足はあつちに行かうと思つて居つたら歩くことは出来ない。根柢に一致點があるから初めて茲に活氣も活躍も起つて來る。そこに見當をお付けになつた。「各自ラ疆ヲ分チテ用テ相凌轢ス」といふ、日本書紀に凌轢といふ字が使つてある。凌轢といふのは軋る、すなはち衝突だ。いまの列國の不安

の状態、即ち國際聯盟だの平和會議だの幾らやつて見た處で、平和會議に參列した人が歸りにはみな鐵砲を誂へて歸つて來る、その歸りにアームストロングに寄つて來るやうでは何もならぬ、平和會議にならぬ。今日の狀態ではそのくらゐ氣を用ひる様になければ何時何事が勃發するかわからぬ。これを不安といふ。從來の普通の戰爭はその種物が破裂した結果なので、戰爭のない間からも人間に不安……、この不安の状態を憐んでこれを根本より除くには、人間の底を流るところの一つの統一點を與へなければならぬ。それにはどういふものを持つて來ても聊かも苦情も異議もない筈の公明正大な道を一つ立てなければならぬ。それをば積慶、重暉、養正の三綱と仰せられて、その積慶、重暉、養正のために、これを事實の力とする爲に國家の結合といふものゝ上に現された。であるから日本の國といふ形式をそなへた物質の國家といふものは、即ち正義の結晶である。それが武なんだ。

それから武育は即ち德育である。吾々が使つて居るこの武といふ文字、いろく議

論はあるけれども此武の字が一體さういふ字だ。正といふ字に戈を加へたもので、正といふ事は先づ眞といふ事が働き出した場合の意味、眞は眞理、眞理はどういふ關係にあるかといふと、眞理は即ち正義でなければならぬ、眞理に背いた正義といふものはない。ないけれども眞理といふものは言ふこともなく行ふ事もない。黙々として四時行はれ百物生す、それ文ではいけない。それを人間の仕事の上に移して行かなければならぬ。實行に移して行かなければならぬ。眞理を實行に移した場合を正義といふ。そこで正道ともいふ。即ち正だ。大體正といふことがこれも文字の話のついでだからいふが、一を以て止まる。秩序とも譯してあつて中心が一つあつて。其中心にみな集つてぐらつかないといふのが正。佛教では『十方佛土の中には唯一乘の法のみあつて二も無く亦三も無し』とある。孟子も『天に二日なく地に二王なし』といつて居る。それを正といふ。だから吾々の履み行ふべき處の道は一つである。先づ差詰め日本人としては、日本の國體を自分の心としなければならぬ。これは日本人ばかりでなく世

界中をさうさせなければならぬ。然しいま世界は、それほど準備がしてない。ぐらついで居る。それは完全に日本が理想の國家になれば黙つて其影響は全世界に及んで、みな日本の國體の前に拜跪して初めて世界に絶対平和が來るのである。國際聯盟も平和會議も、そんなものがあつたものではない。それが日本の魂だ。

此正を養ふといふ養正、正を養ふために國家が要るから、國家は必要だ。けれども養ふにも種々ある。紛亂した世の中へこれを持つて行つて移す、紛亂と附合つてゐた日には正が玉なしになる。だから正義に斷行力を附與したその斷行力が武だ。その正に戈を加へる、戈を以て正義を守るといふことが武なのだ。さうすると所謂武器は人殺しの道具でなくて正義を守る武器である。日本の武はさういふ所から出發して居る。だから昔から町人百姓といへば活殺を保障してゐない。武士といへば活殺を保障して居る。けれども人間の情はどちらにあるかといへば武士にあるとしてある。武士の第一條件は情を知ることだといふ、人を殺すことだといつてない。

源義家が前九年の役に於て彼の阿部貞任を衣川に追詰めた。義家の矢つばに箱まつたものは、千人が千人助からぬといふ弓矢の神といはれるほどの人である。勇武鬼神の如き義家がさういふ矢つばに箱めた貞任をいま一矢に射止めようといふ時に「衣のたてはほころびにけり」といふた。衣といふのは衣川といふ所だ。衣川の館はもう陥つてしまつた、お前もう逃げてでも駄目だよといふことなんだ。それがどうも鬼神と稱せられたといふ桓々たる勇武の中にさういふ餘裕があるといふ事は、何から出て居るか。「衣のたてはほころびにけり」と呼び止めたならば、そこでちよつと餘裕があつたから貞任が振返つて「としをへし糸のみだれのくるしさに」といつた、これも偉い。なか／＼吾々はこのくらゐの歌は二月ぐらゐ考へなければ出來はしない。義家も義家だが貞任も貞任だ。「衣のたてはほころびにけり」といふと「年をへし糸のみだれのくるしさに」といふたので、流石の義家も感心してしまつた。持つて居る弓矢を落さんばかりに感心した。矢壺に箱めた仇敵であるけれども、これを宥して命を助けた。後

に誅戮はしたけれども、斯ういふ優美なことも、餘りやさしい話だから、つくり事ではないかといつて疑ふ人がある。よしんばつくり事としても、日本武士として斯ういふはなしがあるといふことは、日本武士の情といふことを知るに十分である。來月十九日に私は奥州の勿來の關へ櫻を植えてそれへ碑を建てる。義家朝臣は陪臚の舞樂が大層好きであつたから、當日式の時には、山上に於て陪臚の舞樂をやる。今準備中でありますが、數日中に其碑は大きな碑だけでも建てることになつて居る。勿來の關は義家が

吹くかぜを勿來の關とおもへども

道もせに散る山ざくらかな

といふ歌を詠んだといふ。彼の勇武絶倫の名將の腸から、春風三月落花の中、馬を花吹雪の中に進めてかういふ優美な歌を詠んで、それが餘韻嫋々として後世に遺る。勿來の關は天下の要害として三關の一であつて昔鎮守府が置かれた位な所だ。けれ

ども勿來の關にどんな事があつたといふことはちつとも傳はつてゐない。たゞ義家が通りかゝつて花の散るのを詠んだ歌の話だけしか勿來の關には残つてゐないといふ。かういふ優美の話が傳はつて居るといふこと、即ちこの義家といふ人の人格は何から來つたかといふと、これが日本の國體、國性のそのまゝ現はれた日本民族の典型だ。別して武士の典型である。そこで先づ神武天皇に還る能はずんば、切めて義家に還れといふことを有志の人に言つて聞かせ、精神作興の演説をやるつもりだ。これには大分懐中が損むけれども、男だ、乗りかゝつた船だ。三百本ばかり櫻を植えて碑を建ててやらうといふので、いま別仕立の汽車を交渉してゐるやうです。

何でそんな事に力を入れるかといふと、この國性の荒み民風の頹廢した中でこの國がどういふ意義を以て成立ち、日本の國體國性といふものが此處にあるといふことを一日も早く民間に普及して、近くは前年お下しになつた精神作興の興國の大詔の御聖旨を民間に徹底したい、國體の自覺といふ事を喚起したいといふに外ならぬ。

その武士の強い中にも、義家などはもつとも強い方だ。旗頭だ、鬼神といはれた。十代で以て、三軍の大將としてお父さんに附いて行つて、奥羽の天地を蹂躪して大功を奏したといふのだから強いに違ひない。強いといふのは幾分事實かと思ふ、其強い人間から優しいものが申譯的に印として出て来たなどいふのとは譯が違ふ。眞に國體の自覺、國性の流露、楠公も忠臣であるけれども楠公の忠義と義家の忠義とは場合が違ふ。楠公はあゝいふ時に際會したからあゝいふ特殊なる忠義でなければ事が捗らない。だからハナハナしい行動を以てしたのは當然である。義家の際には天下泰平でたゞ奥羽の方に亂があつたに過ぎない。だから義家が奥羽を平定して敵將の首を持つて實檢に備へようと途中まで来ると、その時の廟堂がこれ等の將士に賞與を下さんければならぬといふ時に、これは公の戦争ではない、私の争ひである、私闘であるといつて廟議が斥けた。時の大藏大臣か何かケチな奴だつたんだらうね。さア義家は我慢しても多くの將士が承知しない。勲功を樹てて都に錦をかざつて意氣揚々と歸

つて来ると、それは貴様達の勝手に喧嘩したのであるといつて朝廷はかまはない。散々骨を折つて命懸けになつて戦争をして漸くこれを平定した曉、それはお前たちが勝手にやつた喧嘩であるから、従つて勲功を賞しないといふたならば、今日だつたら忽ちストライキが起る。そこで義家は已むを得ず、それでは此敵將の首を實檢に備へるまでもないというて途中に厚く葬つて了つて自分は直に郷里に歸つた。

治まらないのは勲功を立てた將卒で、これには義家は自分の私財を投じて國家になり代つて悉くあつく賞與をした。自分は貧乏しても全部にやつた。だから一人も國家に對し不平をいふものはない。さうして朝廷をも恨まない。かういふ圓滿にして忠誠、さういふ忠義の心があればこそ鎮守府將軍兼陸奥守源義家こゝに在りといつて弓づるを鳴らしたら、白河天皇の物の怪の御惱が平癒したといふ、忠誠天に通じたといふのであらう。

この肺肝から出た忠義はみな國體の現はれである。だから日本人の典型だ。これは

いまの國體を體し國性に則り、それから現はれた忠義なり武力なり勇氣なり所謂優美な文藻なりである。別に歌を詠むために歌を習つたのではない。自然と其情操が薰陶せられて現はれたので學問をされた爲ではない。綜合して現はれたこの圓滿なる人格の中に日本人の日本人たる所以がある。之はみな國體國性の現はれである。例にひくのは畏多いことでありすが、神去りました。明治天皇、私は國體の權化と稱し奉る、しかも一言たりとも政治上の事にあれこれと御意見をお出しにならない。黙々としてひとり行つていらせらるゝ中に、あの潤澤な哲學、信仰、思想、かの御製に現はれたあの偉大な文化の要素をお持ちになつて、さうしてこれを不言實行の間に國家に行はせられ、上 祖宗の神靈に答へ奉り、さうして世界萬邦に向つて日本てふ國家を圓滿に表現なされたといふことは、即ち國體の現はれである。大きいか小さいかの違ひはあるけれども、よく國體を體し國性に則つて居るといふ事が、眞のなしの儘の國民。間違つた佛教や、間違つた宗教や、間違つた西洋流の學問などに動搖されてし

まつて、日本人は病氣になつてしまつた。日蓮聖人は佛教家であるけれども、今日の本のこんな有様は習ひ損ひの佛教がいこんなにしたのだといふことをいはれた。

世間の罪に依つて惡道に墮つるものは少く、佛法の罪に依つて惡道に墮つるものは大地微塵より多し。

と歎かれて宗教の革命をなされた。それはみな習ひそこなひだ。

明治天皇は廣く智識を世界に求めると仰せられたが、

よきをとりあしきをすて、外國に

おとらぬ國となすよしもがな

國體國性に則つて世界萬邦の文化を吸收して、さうしてそれを材料としてこの國體の純正を磨けといふ思召である。ところがその衝に當るものが段々誤つて、西洋の文化を學んで日本の文化を滅ぼす。明治天皇は日本の固有文化を高調する爲の肥料として、外國の文化を採り用ゐよと仰せられたのに、其精分を取らないで悪い部分だけを

取る。而もそれを嚙んで食はない、鵜呑にするから不消化になる。不消化のままて以て横行濶歩してゐるそれが思想界の現状である。それはもう勞働者といはず、百姓といはず商人といはず、今日滔々瀾漫殆ど天下を擧げて反抗氣分權利思想が横溢して居る。この中に於て秩序の觀念なんといふものは成べく破壊しようといふ。長上に反抗することを以て伶俐だと思つて居る。けれども世の中は秩序がなければ治まるものではない。據なく秩序で治まるのではない、秩序といふものが眞理の表現だ。萬物をのところを得るといふことは秩序にある。秩序を積極的に返さなければならぬ。軍隊の教育といふものは秩序が生命だ。そこで學校は自由討究だとか創造能力だとかいふ。そこへ持つて行つて壓迫的な軍事教育などをやられた日には、堪らないといふのが大山郁夫君の説だ。日本の武といふものはさういふものではない。決して人の自由を妨げるものではない。創造能力を阻止するものではない。この眞の武を諒解した上にはじめて本當の自由はある。勝手氣儘な自由などいふものは、其は當り前の人間

世界に存在せしむべき價値のない放逸惰弱だ。放逸惰弱などいふものは病だ。自由を以て放逸と解して居るから堪らぬ。眞の自由は眞理によつて生きる無制限の力といふ。武育のなかに於て眞の自由はある。創造能力もまたその通りだ。正義を守る、正義を物にうつして守る。先づいま私がこゝに書いた正義、これは精神状態の方に屬して居る精神界のものとしませう。それから戈はこれは物質界のもの、戈といふ武器は物質である。正義の觀念といふのは精神、その正義の精神を物質の戈と一緒にして、それは二つに割れるやうに一緒にするのでなくして、精神と物質とを融和して一つにする。渾然として一體になるといふことが武だ。それが即ち正義の斷行力となる。正義の觀念のない武は眞の武ではない。

夫は近代の世界の軍事行動とか、國防とかいふやうな事は、正義の觀念もへチマもない。たゞ利害の觀念、利權の保障といふに過ぎない。其は人間の恥づべきことだ。食ふ物がなかつたら食はずに死んでしまふが宜い。何も必ず食つて通らなければなら

ぬといふことはない。禽獸と同じことだ。食つて通らなければならぬといふ理由はたゞ一つある。この正義公道を守るといふ人間こそ食つて通らなければならぬ。この故に初めて人間の食物の尊いところがある。その道とか正義とかいふものを棚に上げて、たゞ食物本位でマルクスのやうな理窟をいふなら犬猫と同じことだ。人間を犬猫と同級まで値下して了つてそれが文化だといふ、そんな馬鹿々々しいことはない。マルクスは物質の方から精神を支配すればいい、社會さへ改造すればいいといふ、それを唯物史観とかいふ。けれどもそれを實際に行つたならば——マルクスの思想を實際に行つたのはロシヤだ——それをやつて見たけれども鼻をついた、實際やつて見たけれども駄目だ。即ちマルクスに對する最も熱誠なる遵奉者レーニンによつて、マルクスの主義のいけないといふ事が分つた。今日ロシヤもいくらか精神界に降参して來て、この頃レーニンの肖像を掲げて辻で以て教育して居る。いまの辻説法見た様にやつてゐる。

英雄崇拜とか精神の共鳴だとかいふことは、過激思想に於ては七里けつばい忌み嫌つて居つた。それを今日やらなければならぬ。農商が多少自由耕作をやるやうになり自由商業をやるやうになつたといふことは、もはや資本主義に降参して來たやうなものだ。資本主義の善悪、共産主義の良否は別として、矢張片だけを見て全部を見ないものは、何處かで蹉跌の來るものであるといふことに氣が付かない。マルクスなどは無責任な事を言ひつ放しだからいゝけれども、貧乏籤を引いたのはロシヤだ。けれどもロシヤには感謝していゝと思ふ。この天下の思想界を惑亂するところの根源であるマルクス主義を、ロシヤといふ大國を惜氣もなく草紙に使つて、人類に之は駄目だといふことを試験して呉れたモルモットであるのだから……そこで私はいまにこのロシヤなどから段々日本の國體を憧憬し、日本人より一足さきにロシヤ邊りから日本國體崇拜論者が出て來やしないかと思ふ。だから人類社會に斯ういふことは駄目なものであるといふ事を、事實にやつて見せて呉れたのだから感謝してもいい。それに

就ても日本のこの正義の觀念が物質の上に現はれて來るといふその正義を物に實行する、物質がなければ實行力もない、それが即ち正義に戈をかけた武だ。この戈はこれは國だ。國は即ち武力の根源なのだ。戦争するのだつて米がなければ戦争は出來ない。諸君が戦争に行かれるのにたゞ鐵砲を持つて行けばいいといふ譯には行かぬ。鐵砲もなければならぬが食物もいる、やはり軍需品も大切なものだ。米もいる、鐵砲も靴もいる、いろ／＼な物が要る。みな國土内に産出する物質だ、それはみな武だ。その上から見れば手拭一本でも米一粒でもこれはみな武器だ。斯ういふ働きをするといふ組織に拵へたものが國である。であるから日本の國は國が即ち道である。私が何もさう決めたのではない。神武天皇の御計畫がさうだ。國即道である。これを一言一句たがはず、瓶の水を瓶にうつす如く一滴も損じないやうに傳へ來つたのが皇室である。だから御代々幾百萬年の後に到つても、これは變るものではない。天照大神がずつと延長して來られたので、これを現人神と申しあげる。

國民はといふと國民もさうだ。國民は數が多いから億兆といふ。けれども其億兆が五十歳で死ぬものもあれば六十歳で死ぬものもある。幾つで死なうとも一つの民族精神を以て傳はつて行けば、民族精神の上に於ては、永久に滅びない一つの種だ。それを食つたり飲んだり、今日の人間が戀愛だの權利だのいふ様なことをいつて騒いで居るのは、虫蟻と同じことである。けれども一たび國家の使命を自覺して我は日本國民である、即ち日本國の樹つた所以の趣意を奉體して、其を自分の心としそれを自分の身にうつして農業でも工業でも商業でも、みなこの國體の使命を行ふために俺たちはやつて居るのであるといふ觀念を持つてば、その觀念の中にその國民は滅びない。であるから日本國民が何億の多數なりとも一人である。何萬里距つて行かうが一つの生命で死なない。丁度帝室と同じ事。帝室も天壤無窮なら國民も天壤無窮、其は此道を行ふ機關たる國は君だけでは出來ない民もなければならぬ。民と相俟つて行ふ。そこで神武天皇が日向から大和へお出になつて國民と握手せられた、即ち天業の

君と天業の民と握手して、この天津日嗣の事業を完成するために、日向から大和に出でになつたといふことは、大和に會て神武天皇より前に、饒速日命が降つた、饒速日命はすなはち國民の源統として降られた。瓊々杵尊即ち神武天皇の方はこの國民を支配するところの統轄するところの君主の系統として降された。この方には三種の神器を與へられた。饒速日命には十種の神寶を與へられた。そこで神武天皇は饒速日命がこの天業を擔つて民族の源統として降つて居るから、その方へ行かう、この邊陲の西のすみの方にわたるのでは世界的事業は出來ないから、饒速日命が行つたところへ行かうと仰せられた。日本書紀の明記する處によれば然うなつて居る。

何處からまいところはなにかというて他の國へ出て、だんく進んで大和へ來つたといふ國學者一流の説は全然誤りである、期する處あつて大和へお出でになつた。その饒速日命の國民の系統は、三十二柱の神をしたがへて天上の文化を日本に移植するために、即ちこの天業の奉體者としてもう既に地盤をつくつて待つて居る。たゞこれ

を統轄する人を待つただけだから、神武天皇がこれへお出でになつた。即ち天羽々矢を以て證しとして名乗をあげ双方交渉したところが、一人長髓彦はこれに反抗したから、饒速日命は之を誅戮して神武天皇に降參し自分の天神より貰つた十種の神寶を奉つた。神武天皇のお手許にある三種の神器は則ち智仁勇の三徳で天下を治めるの徳を表示し、十種の神寶は民業の表示であつて、天上の文明をこの國に布いて天照大神の理想たる王道を實際に行はうといふこの仕事の負擔者である。であるから國民も尊い。神聖にして侵すべからざる國民である。天壤無窮の國民が天壤無窮の君を戴いて、さうして天壤無窮の王道を人類の上に立てようといふ仕事は日本の建國の事業だから、之を天業と仰せられた。『天業を恢弘す』といつて弘める、日本だけでしまつて置いてはいかぬ。これを弘める必要がある。『皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ然ル後、六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス』といはれた。萬邦を一つの家とする、世界を以て一軒の家にする、八紘一字。『六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開ク』、六合は世界

中だ。都といふのは即ち文武の政の源を都といふ、即ち世界統一だ。これは政治的に仰せられた。『八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス』といふのは人類的に仰せられた。人類的一个の標準、政治的一个の標準、其は何かといふと即ち正義、其正義の内容は何であるか、積慶、重暉、養正だ。これ以上の文化はない。自由平等博愛などといふやうな鉞力細工のものとはわけが違ふ。南蠻鐵で鍛へたやうなものだ。その積慶、重暉、養正の三綱を掲げて建國の要領となされた。

その三綱を心とした帝室、その三綱を心とした國民、三綱を心とした政治、經濟、學問、藝術でなければ眞の文化ではないといふことに氣が付かない。文化といふと西洋の眞似をする。文化村といふのは何だといふとペンキ塗の家を建てるのが文化村といふ。そんな文化は駄目だ。正義の表現が文化だ。その正義をものに執行する力、そのものを今度心で纏めてさうして心靈化する。それが眞實の人生だ。

マルクスは物だけでおしまひ、併しながら物が心を支配するといふことは進歩した考へだ。佛教の中に於ても日蓮聖人の前にさういふ事を言つたものは一人もない。日蓮聖人が法華經の原理によつて物から支配しなければいかぬといふ事を言はれた。マルクスを距ること六百年前に日蓮聖人は既に言つて居る。しかしマルクスは物限りで精神を保持して居る肝腎なものを一つ忘れて居る。日蓮聖人は心を土臺として物をこれに従はしめ、さうして置いて物の全體を心的化してしまふ。さうして物心融和した中に物心相關の妙を立てるから、物も心もおの／＼その所を得て働く。それが萬有の道理であつて、佛教の原理は一念三千が原理であるとかう説かれた。日本の國體は日蓮聖人によつて出来たのではないが、説明は日蓮聖人によつてなされて、遺憾なく日本の國體を世界に發揮することが出来た。であるから私は日蓮聖人を坊さんの親方だとは考へない。日本國體の開顯者であるといふ。坊さんの方には少し氣の毒だけれども、お厨子の中に入れて、それを開けて見せて幾らかづゝ取る。そんな吝つたれた日蓮聖人ではない。『我れ日本の柱とならん』と言はれたのはさういふ所にある。

日蓮聖人は僧侶ではない『日蓮は何れの宗の元祖にもあらず又末葉にも當らず』宗門の祖師などそんなものではない。『我れ日本の柱とならん』だ。其の日本の柱といふ自覺の中に日本を背負つて立つといふ氣力と、日本を背負つて立つ所の解釋力を持つて居るからだ。

解釋力を持つて居るといふが、解釋されるものは何だ、日本の國體だ。その日本の國體は、二千五百年前に 神武天皇が開かれた。如何にも立派に痒い所へ手の届く様な明々白々な此建國の大精神を、世界人類に向つて宣言されてある。この大綱に書き現はしてあるのが氣が付かない。そこで明治神宮の御遷座式の時に、私は『世界を舉げて日本國體を研究せよ』といふ宣言書を發表した。これはマルクスの共産黨の宣言に私が對抗したのだ。

海外諸國に大宣傳を企てるだけの準備がまだ整つてゐないから、こちらだけでやつて居りますが、うちの若い者がドイツに留學をして居るときに、やはり陸軍の少佐で

石原といふ人と一緒になつて、その宣言書を英譯と佛譯と獨逸譯にして、世界各國の帝王、大統領、大政治家、學者、大新聞社といふやうなものに何でも七八百送つた。

さうすると、をかしいことには、ドイツのマルクス社會主義の新聞がそれを見て非常に驚いて、吾々のマルクス主義は、物質より出て物質に終るんだが、田中氏のいふ日本の國體は精神より派出して精神に歸着する、その間に物質をも調和するといふことは、實に吾々の大いに注目すべき思想であるといふことをいつて居る。ドイツの社會主義者の方がずつと精巧だ。日本の社會主義者などはわからぬ。

それから絶對平和の宣言の中に 神武天皇の『又に亙らずして天下を平げん』といふ言葉を引いて、それを非常に感激したものと見えて、何でも半段以上に亙つた評論の中に、その 神武天皇の勅語だけは變體の大きい活字で出した。『又に亙らずして天下を平げん』といふ 神武天皇のお言葉、絶對平和主義武徳旺盛の神様である 神武天皇の御精神は『又に亙らずして天下を平げん』といふ心、さういふ心から出るから

その武は何ものをも斷じ去るところの無限の力をもつて居る。この醇雅の本性的なかから出るからその勇武は眞の勇武である。即ち武士は情といふ、情の權化であるといふそのお言葉だ。それを初號活字で大きく出した。餘程感じたものだ。從來日本の新聞が大きな活字で出すのは大抵人殺し、泥棒、議會の騒動、誰とか懲罰せられたとかそんなことは大きな活字で出す。國體運動だとか親孝行だなどは六號活字か何かで出す。所がむかうの方では、社會主義の新聞にしてなほさうだ。その記者は何でもメーブスとかいふ學者だ。だからどうも孺子誨ふべきものだと思つた。いまは、レーニンが死んで居ないけれども、私はレーニンに生前會はないことを甚だ遺憾に思つて居つたけれども、私は世界で注目すべきものはレーニンと、ムツソリーニだけだと思つて居つた。レーニンは死んでムツソリーニは病氣だといふことであるが、併しながらこのメーブスのやうな隠れた斯ういふ風な人間が世界にはある。

日本では可なり私が聲を大きくして、力めてこれを師子吼して居る、巨萬の財産を

費して我が黨は、非常な苦心慘憺を以て國家の正氣を維持するために日刊の新聞まで出して堂々とこの正義を主張するけれども、一向日本の社會主義者などといふものは漢も引掛けない。低級だ。こんなに低級になつたのは何であるか。吾々の主張に對しても、臭いものに蓋をするやうな、敬して遠ざけるやうな態度を執る。そしてかういふ思想はこれを反動思想であるとか、守舊派であるとか、保守的であるとか、或は軍閥の廻し者であるなどいふことを能くいふが、いはゆる軍閥なんぞといふものは、私は齒搔いものだと思つて居る。軍國主義だといはれるからといつて、軍人が一しきり軍服を着て歩くのを嫌がつて、背廣などを着て歩いたことがある。そんな者つたれた事だからいけない。

舉國武裝といふ私の議論からいへば、巡查などは要らない、兵隊がやればいゝ。年中戒嚴令を布いて置けば泥棒などは出やしない。わざわざ泥棒のあるやうにして、泥棒に逃げられると新聞記事の差止めとか何とかをして、やつと捕まへて裁判をして、

控訴とか上訴とか下らないことをする。さうして貴重な國費と時日を消費して調べた上で、これを懲役場に入れ、國庫からもものを食はして養ふ。さうしてそれが懲りて出て來るかといふと、一遍懲役に行つたために段々圖々しくなつて、追々悪人に化して來る。みなさうだ。社會主義でも泥棒でもさうだ。そんな鈍間なことをして居るよりも、事を未然に防げばいい。武装した兵士が筒先を向けて『オイ』と聲をかける。正しい者ならば『何だ、何か用があるか』といつて立止るが、怪しい奴ならば必ず逃げる。逃げたらボンと撃つ。こいつの方が早い。裁判もなにも要らぬ。慈悲などいふものはそんな所に使ふものではない。

國家の騷亂の種をまき、多くの人間を苦しめる、此くらゐ無慈悲な事はない。子をば親が可愛がる心、我子を親が膺懲するのは、我子を善いものにしようが爲である。だからその膺懲は、嚴の教であつて又愛の教である。嚴愛の二義から膺懲しなければ眞の教育は出來ないと佛教は説いてある。その嚴にするには年中戒嚴令を布いて置け

ばいい。戒嚴令を布いて置けば天下泰平だ。簡單だ、常備兵の僅か一部を置けばいい。兵隊一人で巡查百人くらゐに向ふ。何でもものは簡單にしなければ駄目だ。さうすれば悪い事をする者はなくなる。このくらゐの慈悲はありはしない。それほど治國の大功用ある軍事教育をやるといふことを以て人殺しの教育だとは何といふ言草だ。軍事を人殺しと考へて居る様な低級な頭で國事を議された日には、實に堪つたものではない。それは何處かの國には、人殺しの軍事をやつて居る所もあらう。大體はさうであらう。けれども日本の武は、少くとも日本の軍人は國體の精神を體して、近くは明治天皇のあの懿徳をかうべに戴いて、この正義を守り國を護るところの尊い劍を持つて居る。この劍の鳴るところ即ち正義の鳴るところである。正義を守るといふ武を擴張するのに、何の遠慮があるものか。それを、他國の間違つたものを持つて來て、此方の例として考へるから違ふ。これは尾崎君は憲政の神様といふ人間なのだが、神様にしてかういふ誤解があるのだから、この下は大抵みなその尻馬に乗つてワイ〜い

つて居る。

私がこの間軍事教育に反対運動をして居る奴はどんな奴かと思つて新聞を見たら、大抵不良青年か何かのやうなものがやつて居る。健全な國民がそんなことに加擔する道理はない。寧ろ軍事教育の遅かつたことを吾々は慨歎する。そこで大山君は教育の獨立などいふことをいふ、日本の教育が勝手放題に獨立されて堪るものではない。國家と没交渉な教育ならばこれは有害だ。さういふものは根絶しなければならぬ。私は常にいつて居る。此日本の教育は人間を造ることを理想として居つたら、大變な間違ひだ。善き人間を造るのではない、善き國民を造る。さうだらう。たゞの人間を造つたら、それはたゞの人間であつて國民ではない。その國民になり損つた奴はいくらもある。

幸徳秋水だつて、人間としては相當な人間だが、國民としては落第だ。この頃大杉榮の全集とかを出すとかいつて、廣告してあるのをこの間見たら哲人だとか書いあつ

た。鐵人だか銅人だかしらぬが、あゝいふ國家を滅ぼさうといふ様な者が出て来る。夫をいゝ氣になつて謳歌して居るといふほど間違つた世の中である。日本の國民は日本の國家と離れた觀念を、針ほども持つてはならぬ。今私のいふのは日本國體が世界人類のあらゆる文化を超越した、その總支配をする立派な使命をもつた文化であるといふ事である。それほど大きなことは彼等の耳には入らないとしても、日本は日本として國家存立の必要があるのだから、日本國家存立の上に危害を及ぼすべき思想は眞理であるかと否とに拘らず、これは存在せしむる必要はない。まして況んや『斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と宣せられた人類の公道である。かく古今を一貫し世界を一貫したるところの、大公至正の道であると仰せられ、『朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』と宣せられてある。日本の國體といふのは、すなはち斯の道なのである。

この間、國體といふことが議會の議論になつた。國體とは何だ。答へる人はみな様々だ。さうすると澤柳君は教育勅語の國體とこの治安維持法の國體と違ふかどうかと聞いた。違ふ、違はぬ、いろ／＼な説がある。法律をこしらへた政府が國體が何だか分らない、質問する方でも解つてゐないらしい。併し初めて日本の議會に國體といふ言葉が議論に上つたのは、實に私はもの、不思議だと思ふ。それから其記事を書くとして新聞は國體何とかと初號活字で出した。我國肇まつて二千五百八十五年、初めて日本の新聞に國體の二字を大きな活字で出した。年代記ものだ。これまで國體といふことを、私は四十年来主張して居る。どういふ活版所へ持つて行つても國體といふ字を必ず國體と組んでしまふ。國體といふ言葉はあまり使はぬ、多分國體の間違ひだらうといふ考へからだ。それほど國體といふことに無關心であつた。それを國體といふ二字を、初號活字で新聞に書く様になつた。これから國體の内容がそろ／＼分るやうになるだらうと、私は一面悲しんだが一面は喜んだ。

そこで前の總理大臣に私は、日本の大學は官私立を問はず、國體學の講座を置くがいゝといふ事を説いた。それは吾々の意見を聴きたいといつて招かれたから私はいつたのである。けれども有益な御意見とか何とかいつても其後一向やらない。やらないうちに今度の内閣になつてしまつた。今後の内閣はまた國體で以てギシ／＼やつて居る。大體國體をどうかした者は十年以下の懲役に處すとかいふ、そんな安つばい考へでは國體の内容も値打も判らない。

この國體心の自覺が、どこまで復活するか、それはこの軍事教育によつて起つて來る。これが日本人の覺醒の幕開きだらうと私は思ふ。そこで諸君がこの光輝ある任務に従事せらるゝについては、日本の國家を背負つて立つものであるといふ深遠なるお考によつて、此教育の衝に當らんことを、私は國家のために希望してやまないのである。これまで此講習會でいろ／＼有益な御研究もあつたでありませう。私共は門外漢として甚だ僭越な事を申上げるやうであるけれども、先づ魂、國體の魂、こ

れを一つ入れなければならぬ。たゞ戦闘訓練、兵隊ごつこを教へる、そんな考へでは
ならない、魂を國體に置かなければならぬ。

昔、東洞吉益といふ名醫が、それが零落の巷より拔擢せられて遂に名家となつた。
時の天子様だか皇后様だか、御大患で、典藥の有司も非常に苦心している。な薬
を差上げる。どうも御快癒にならぬ。そこで此頃民間に令名噴々たる東洞に、一つ診
せたらどうであらうといふので、東洞が遂に拜診の榮を得た。そこで處方を申上げた
所が、その薬はそれまでも度々差上げて居る、けれども一向効が見えない。だからそ
れは上げても駄目だといふことをいつた。そのとき東洞吉益『いやこれで大丈夫だ』
『この薬は吾々の上げたのと同じ薬だ、同じ調合で同じ分量で同じものだ』併しこれ
には一つ這入るものがある『何が這入る』東洞吉益の魂が這入る』と答へた。實に
名言だ、何事でも魂を盛らなければならぬ。ところで主上から兎に角信賴して診て
貰はうと切出されたのだから、それでは伺つて見ようとなつて伺つたところが、東洞

の薬を服まうと仰せられた。差上げたところがその魂がどういふ風に作用したか遂
に御平癒に及んだといふ話がある。これはその薬の用ひ方とか何とかいふことに、專
門的に何かあるのでせう。けれどもその大體は精神である。

それから軍事教育について、あるひは大仕掛けにやるとか、あるひは之を地理的に
限界するが、いゝとか、國家的にやるが、いゝとか、いろ／＼注文があるでせうが、それ
はみな必要でせう。それは私は知らぬ。私の祈るところは、たゞ諸君のおやりに
なる事に就いて、何でも魂、いま東洞吉益の魂が這入るといつたやうに、國體精
神の魂を打込んで本當の日本人をつくり出さうといふ、斯ういふ觀念で諸君が天地
を劈くやうな聲を出して號令したら、一度諸君によつて教へられた人間からこの日本
の夜が明けはじめ。これまでいろ／＼魑魅魍魎が跋扈して、ロシアに鼻をつき文藝
に鼻をついてゐる、復興の方も多分鼻をつくだらうと思ふ。それはついてもいゝ、併
し國體の靈氣、帝室の御懿徳によつて必ず國光の輝く時が来る。思想の混亂その極に

達して我國滅亡の兆であるといふ時にあたつて、旭日瞳々と國運回復の時が来るものであるといふ事を、私は二三年前に言明した。出るだけ病が出る。社會主義も出る、共産黨も出る、いろ／＼なものが出るだけ出てさへしまへば、あとは綺麗さつぱりとなつて、無病息災になる。要するに過渡期である。けれども先づ日本が、自ら日本を知らなければならぬ。

そこで私がこゝに之を區別を立て、申せば第一が國體の體であります。こゝにいふ國體とは其原理である、國の本體である。本體といふのは國の形と國の心、物質と精神の全部を持つて居る。けれども重きを精神に置くからこれを心といふ。その實は物をも包含して居る。それから體といふ字はからだといふ字であるけれども、精神的に解釋するときは體達とか、體得とか「朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ」といふ體、心に結びつけて實行をなさうといふ時は體得といふ。日本の國體といふことは、皇統連綿萬世一系の帝室君民一致の國の相、すべてを通じてそれは國體である。その國體の

もとは天壤無窮の道だ。道とは建國の三綱である。それが本體、その本體に性來にしみ付いて居る性分があります。これを國性といふ。國性は即ち忠孝で、この日本人の忠孝性は、これは國體が性能化して出たものである。であるからこれを國性といふ。それからその國性が形の上にだん／＼現はれて來て、秩序の配置をなした。まづ君臣の禮儀、國家の體例とか、政治とかいふ様な形に現はれたこと、これを國相といふ。國のすがた即ち『萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス』といふことは、この表面に現はれた國相についていふことである、その國相の中に國性が含まれて居る。其源に國體があるので、これが今度運動を起して來る、それを力といふ。國體國性より發生する力を國力といふ。いま國力といふと直に財産のことばかりいふけれども、財産も國力の中だ。けれども財産ばかりではない。國民の氣力、それが第一番、即ち武育によつて尙武の氣性を起す。此尙武の氣性、これは氣力だ。まづ精神力から精力に及び、それから氣力となり氣風となる、軍人勅諭にもある軍人精神といふのもそれだ。そこか

らは必ず秩序といふものが現はれる。その秩序が國相だ。國性的差相だ。夫からその國性國相があらゆる方面に活現して、これが、物質の上にも及ぼしてゆくのであるから、國體、國性、國相の三つが力となつて現はれて、今度その力が作用を起す、相性體力作とかうなる。力といふのは運動である。原動力。作は作用、作用といふのは、即ち政治だとか經濟であるとかいふ、その運用が作だ。初めの國體精神が、その物質的の上にならぬ。秩序の相となつて現はれ、君臣の秩序、一家の秩序、社會の秩序、世界の秩序が整つて来る。その秩序が生んだ絶対平和が眞の日本の建國の理想として期待するところの平和である。その秩序の正義を維持するのに力がある。この力は即ち正義を物質的に實行するもので、その物質的に實行する時に力といふものになる。力がなければ、原動力がなければ、正義とか眞理とかいつてもそれは人生の實際のものにならぬ。

其力を組織的にしたものの、それが日本でいふ處の武といふものである。だから日本

は、大體さういふ風な運命に出來た國であるから、國の名も武を以て立つた國、即ち細矛千足の國といふ。この國は武器が生命であつて従つて武器を用ひることに練達して居るといふ。それはたゞ氣質の上から許りでなく物の方から見立てたので、細矛千足の國、神代から既に武器がちゃんと備はつて居る。國の武器を造る家があつて天津麻羅或は齋部などはみな武器を作つた、さうして天下の有らゆる神社にみな武器を納めた。垂仁天皇の皇子の五十瓊敷入彦命、あの方が末廣の太刀を、川上といふ鍛工に命じてつくらして、石上神社へ納められた。さういふ武器の發達したといふことは、すなはち武力の旺盛な證據である。武臣を物部、或は久米部などといふ、久米部といふのは、丁度今日の近衛師團のやうなもの、物部といふのは、普通の師團のやうなもの、さういふものが備はつて秩序整然として居つた。その武は天下を亂す武でなくして天下を治める武である。故に神武天皇は「刃に動かずして天下を平げんと仰せられた。刃に動かずして天下を平げるといふことは、其武が強くなければいけ

ない。武が強いから刃を抜かないでも済むのである。

傳説だから眞偽は知らないけれども、荒木又右衛門は武術の神といはれる程の達人だが、或時賊に會つて衣服も何もみんなとられてしまつた。門人があとで聞いて「どうも僅かな小賊二人三人に驚いて物をとられるといふことは先生にも似合はぬ、何故一刀のもとに斬つておしまひになりませぬか」といふと又右衛門が「いや、武士の劍は賊などを斬るべきでない、賊は物取りに來たのだから品物はみんな遣つたのだ」といつた。それが本當ならば先づ武を心得て居るものである。さういふ人が一朝義のためにつとむるときには強い。

さて國家の教育といふものは、國家とはなれた考へを以て教育するといふならば、何の教育でもみな失敗である。軍事教育はさておいて何の教育でもさうだ。學校で博物を教へるとか地理を教へるとかいふことでもさうだ。この間もどこかで入學試験をしたところが、「瑞穂國」とか「稜威」とか「拳々服膺」とかいふ事を出したら、四百

何十人の生徒の中で一人も満足に答へが出来ない。これは女の學校ださうだけれども或一人は拳々服膺といふのは着物のことだらうといつた。尋常六年を卒業してその上の學校に入るといふことは、相當の家の人間だらう。それは子供が悪いのではない、教育が悪い。拳々服膺といふのは勅語にあるお語である。それすら充分教へてない、教育のお勅語を斯くの如く小學校で輕視して來た。

かういふ状態の中において、國民としての魂を入れるといふこの武育、日本の武育、即ち神聖化したる武、これはどこまでも遠慮會釋なく堂々濶歩して、世界全人類の推稱し得べき、眞の文化の根源たるべき武であるといふことを、私はこの軍事教育に當られる諸君が、教育上の第一のモットーとして進んで戴きたい。かういふやうな愚見を申上げて、御參考に供するために甚だ燕雜な講演を致しました。(拍手大喝采)

國防本位の民心

一 國民を通じて國防意思を起さしめよ

私は國防の事に付いては元より門外漢であるから、國防をどういふ風にするがよいといふ事を論ずるのではない、それは陸海軍及び空軍の當局者が、各専門的知識によりて、如才なく經營するところに信頼して差支ないと思ふ故、その内容に口を入れることはしない、が、しかし、國防といふことを、國民全體がおのれのこととして、造次顛沛にも忘れてはならぬ、換言すれば、國民の唯一の責任として、常に重きをここに置くべきであるといふことを主張するものである。

國を護るといふ事を、人間生活の餘波の如く考へたり、又は餘計な義務で、よんどころなしにやる様な考へで居てはならぬ、凡そ國民として立つ上に於て、自己生存の

第一義が、この國を護る仕事である、各自の職業も修學も、この大目的に向つて進むのでなければ、國民的意義の存在を失つてしまふ、たゞ人間として生きて行くといふならば、國家も社會も要らない、一般動物のやうな生活でも足りる、それが社會的安泰を保たう、人生の意義を完全にしようといふ事に於て、よろづ組織的且つ有機的に動かねばならぬことのため、こゝに單なる個人的存在ではならぬ事になつたところから、人間を組織的に收束して、その意義を遂げしめようための國家組織であるとすれば、國家は人としての一番大切な立脚地である、それ故國家を護ることは即ち自己を完全にする土臺を築くことであり、又各自の本領を發達せしむる最要機關である、ちやうど役者が舞臺を必要とする様なもので、いかに名優でも舞臺でなくては、その妙技を發揮することは出来ない、大道具小道具は悉く舞臺に屬して居る、演技上これを缺いては、技も筋も顯はし得ないのである、國民の國家に於けるや、國家はこの立脚地なると共に、本領發揮に就ての缺くべからざる資料の出處であるから、國家を離

れては國民の意義がなくなることになる、國家の一員として國土に住し國土の水穀を費して居るから國民といふのではない、苟くも國民自身の本領を自覺し、吾が國家の精神を理解し、建國の主義を以て自己の生命とするのが國民といふものである。

此國家に生れたから、此國土に住んで居るからといふだけでは眞の國民とは謂はれない、それは國家の寄生蟲であり、穀潰しである、況んや此國に民となりて、此國を亡ぼさんとする如き國賊をも國民として計算するといふことは、吾々純正護國の志あるものゝ、一日も俱に伍すべからざるものとして同じ天を戴くことを屑しとせざるものである。

自己の立脚地たる國、自己の本領發揮資料たる國、これを護ることからして國民生活は始まり、又結局をもこゝに置かねばならぬ、即ち國を護ることが、國民の一番重大な生活である、飯を食ふのも、子を産むのも、これが爲であるとなつて始めて眞の國民生活が成立つことになる、自己の生きるためといふ前に自己の生きるは國家の爲

といふ條件が儼存して居らねばならぬ。

扱て、國を護ることだが積極的には、學業を修め智能を開拓して、人生を利し社會を益して、自他共存の意義を完うする、政治に、教育に、信仰に、經濟に、藝術に、各方面に亘つて人文の最高地位を占め、國光國威を揚げて、世界平和の理想郷を建設するに力める、これが護國の一面である、他の一面は即ち消極的護國の一事であつて、これは國家存立の當相を危くする諸の障害に備へ、豫めこの災害を發生せしめない様にする事とて、一朝間違つて内憂外患の事實が勃發するに際しては、悉く之を摧破して、一指だもつけさせないまでに確乎として固く且つ強くなくてはならぬ、即ち兵備である。

日本の武は、古來總じて消極的であつて、唯敵に備へる、一朝事がまぢがへばいかなる敵でも粉碎して通る、戦つて捷たざるなく、攻めて取らざるなき桓々の神武であることは、積極的ならずして消極的の武なるがゆゑである、正義を護るための武にし

て、他を侵し掠めるための武でないからである、仁慈に發し義勇に動きて、平和に落居する聖武である、ゆゑに戦つて捷つよりは、戦はずして勝つ方が理想である、神武天皇は『鉾刃の威をからずして天下を平げん』と仰せられた、これが日本の武である、これに就いて國防と云ふ精神が一國に行亘つて、且つ國民生活の中心となつて居らねばならぬ。

二 國民的國防としての二大要件

民間に於て、軍事行動を練習するといふことは、學校での教習、在郷軍人團の整束等を以て土臺とし、さらに一般的に、それとなく平素に於いて、これが基礎的標準ともなるべきものは先づさしづめ平素の用にたちて其れが有事の日に、すぐに國民的勢力として、軍隊の強い背景となるといふ仕組が、一番着實であり且つ有利である、この仕事に二つある、その一は消防で、その二は航空事業である。

其一 消防術を向上せしめて國防に資すべし

戦時でなくても、消防は國民事業の大なるものである、日本の消防は今のところ消防官署にのみまかせて、國民みづからは火事といへば、家財を持ち出す事と、逃ることにきめて居る、荷物を持出すよりも、逃げるよりも、火を消すことを考へねばならぬ、家中なり、町内中なり、火を見ると必ず消す、消し得ざれば家財は焼いてしまふ、「もつてにげる」などいふケチな考へは毫ももたぬといふ意氣にこそ、火を消す力もあらう、又消し得るなら、荷を出して混雜周章するには及ばないのである、これは平素の訓練に在る、即ち小學校教育から始めるのである、あとは町村ごとに、一般的消防方法を練習し、毎月消防動員を行ひて、何でも消しとげる方法を教練する、然し方法よりは精神が第一だ、日本國民は「災の火を見たら必ず消す」といふ氣象を養ふことが大切だ、この意氣の充實によりて恐らく日本の火災は十分の一に減じ、そ

の損害は五十分の一に減るであらう、火災に依つて年々全國に於て失ふ國富は實に大したものである、これがなくなるだけでも、戦勝の償金を年々手に入れたほどの國力の保護となる、扱この餘勢をどうするかといふに、一朝事あるの日は、國民軍として消防の一隊を各町村市郡に組織して直接軍事行動に出て敵を水撃する、これは紙上に現はし得ない一種の方法がある、薬でさへ民間療法として侮りがたい奇方がある様な工合で、普通戰術戰法にない、一種獨特の側面攻撃は存外成績のあることは受合ひだ、詳細は當局者の至誠聰明にして愛國の志篤きものに口づから話すことにする。

其二 民間航空事業を奨励して國防の一助とすべし

民間の航空事業は甚だ振はない、これは國民が航空界に知識を有せず、又指導者も乏しく、一つは國防熱が高くないためであらう、要するに國防の最大必要なることを感知して、扱て何をがな民間相當の良法もあらばと考へ出せば、飛行機を利用するこ

とを思ひつくは必然である、飛行機の奨励としては、

第一 良機の製出

第二 航空術の進歩

の二條件であるが、先決條件として、最良機をつくり出すことである、これには國民全體に一通りの航空知識を普及し、然る上すべてに對し、最良機の製出に關する發明を奨励するに在る、懸賞を篤くして國民を促すのだ、民間からは金錢を贈り、政府からは位勳を奏請し、民をして航空熱に昂騰せしめるを要す、次に航空技術、これも大々的奨励法を講じて、殆んど人ごとに航空技能を有する様にする。

かくてその向上せる良機、熟達せる技能、これを事業化して民間の交通事業を空界に拓くの一事である、平素に於ては文明開發の使者として空界を制し、一朝有事の日は何等かの方法で、側面戰線の御用をつとめる、敵機に數千百千萬倍の機數が、同時に空中戰線に陰行顯走して、ある軍事任務に就き、尙正式空軍をして戰闘に就かしむ

ることは、國民的國防の要を得たものであらうとおもふ、これも詳細はこゝに説盡しがたいから、別に相當者に話すとして、何よりも本件の必要は、國民の國防意氣と、その知識と、その資力の充實に在る、先づ小學教育より此方針で教へはじめ、次に國民的意向趣味實益をこゝに集中する、而してこの根本資力として、國民全體に課して(精神的に)「國防貯金」を開始する、これは内務省と文部省が世話人となり、遞信省が勸進元格で、國防貯金切手の發賣を始め、一方民間に徹底的宣傳を行ひ、物見遊山觀劇の場所等に出張して、「花の日會」式にする、小學校の兒童をして父兄其の他にすゝめる僅かの財も、積もりて偉大なる力となる、尠くとも是れによりて國防精神を發揚せしむるを得べし、予嘗て「國防貯金」と題し、一小文篇を草した事がある、即ち

(1)

政府は茲に國防貯金の一門を開くべきなり、「國防切手」を發行して全國到る處に

販賣せしめよ、劇場可なり、花見可なり、集會譚樂の場所可なり、十字街頭公園遊覽地可なり、所在到る處に於て、花の日會的に盛に賣らしむべし、又小學兒童に課して、自ら月に其一葉を買はしめ、兼ねて父兄郷黨に獎め賣るべき小委員たらしめよ、此小委員！ 護國の基礎修養なり。

(2)

「國防貯金切手販賣規則」を造り、全國の失業者をして所在到る處に之が便賣員たらしむべし、曰く其半額を失業救済に充て、半額は國防の利を生むの趣向なり、國防は舉國の一大事、幾十萬の從業者あるも其多きを厭はず、世に廢物利用といふ事あり、それよりも敏活なる失業利用、政治の妙用、經營の妙機一に此に存す、民の疾苦を救ひ、國の防護を充す、一舉兩得の鐵案。

(3)

國防貯金の切手は、一錢二錢五錢十錢廿錢五十錢一圓の七種位とし、簡易なる貯

金切手臺帳を製して、何人にも販賣せしむべし（失業救済の方を甲とし、此方を乙とし、一割の利を與へ）販賣高により、又購入高により、政府は相當表彰の辦法を設くべし、その多きものは門閭に旌表し、或ひは位勳顯爵を以て之れを賞するも可なり、何でも國民を擧げて國防熱を高調せしむべし。

(4)

國防貯金の資源は、増大に従つて之を左の如く應用す、

- 一 良機發明獎勵研究の資金
- 二 製作精良用材充實の資金
- 三 航空技術者獎勵保護の資金

小學中學兵營工場會社銀行、初等高等それ／＼準備練習して日本人全體殆ど航空能力を有するまでに邁進すべきなり、空の王者はやがて是れ世界の王者なり。

(5)

煙草でも酒でも新聞でも化粧品でも、そのマークの一部に必ず飛行機を描き出せ、どちらを向いても飛行機の畫にぶつかる様に飛行機氣分を充遍せよ、ビール一本、敷島一つの隨時節約でも大した効果がある、積極的には家ごとに兒童ごとに、特に一番の雞を飼はしめよ、月に幾顆の雞卵を、新たに國防の富源たらしめよ、かくて節約も活き副業も活きるなり。

(6)

飛行機の世の中なり、豈たゞ、戦時のみと謂はん、文明の進歩は、由來交通と正比例す、鹽土の翁ありたればこそ、タケミカツチの命もフツヌシの命も仕事を成し得たるなれ、神武天皇も世界的活動を聞き得たるなれ、平時は交通、戦時は國防、而して眞の國防は、先づ國民の心の中に張るべし、すなはち飛行機の國民的發展是れなり、日本人をして世界一の航空民族たらしめよ。

(7)

一錢二錢が何だ、人には思はぬむだはいくらもあるなり、之れを轉じて第一有用の資と爲すは、國家經濟の活指針をあたるなり、實はソナナけちな考へよりも、國防の力の優先提供ならざるべからず、國を護り國を進歩せしむる一番大事の業とあらば、民富利潤のお初穂をこれに献上して可なり、議會も豫算もあるものか、國が亡びたらどうする、毎朝起きたらそれから考へよ。

(8)

敵國より敵機襲來して、自在縦横の空中より、無制限の戦線より、爆彈投下燒玉投下によりて、數時間に帝都を全滅に歸せしむべき恐怖的事實、すでに完全に備へられたる事を想ひ見よ、軍艦砲壘ありといへども、空は明放しなり、猫一疋も居なくなるほどの全滅的燒打を前に控へて、どうしてボンヤリして居られらうぞ。

(9)

天下の富豪は心を揃へて飛行機を造れ、有事の日はいつでも國用に供する覺悟で

盛に造れ、而して平素は交通に利用せよ、自ら用途のないものはドシ／＼貸貸せよ、地代や家賃ばかりが生産ではない、富者は義務として、富に應じて大多數を造れ、例へば三井第何百號機とか、岩崎第何千號機とかいふ様にだ、斷行々々。

(10)

國防の大事を自覺して、それを目標に勤儉を奨勵すべし、無方針に金をためて、段々慾張根性を助長するは人を醜劣にする所以なり、明るい正しい目的に向つて用意すべきなり、かせぐのも是れが爲めにすべし、かくて國防の一擲は、民心作興の第一義たるを得べし、その緊張は民の力となり、その希望は國の輝きとならん。

かくして、民間に此意氣充ち、随つてこの資力集積し來らば、民風も緊張し、民意も向上して、國はおのづから淳正に歸して、この餘勢が限りなき力となるは必定、一舉兩得の大第である、政府はかういふことに力を注ぐがい、政黨だの政策だのとい

ふ愚にもつかない争ひに日を送つて、この間に國が亂れ行くに心付かずに居るとは全く以て情ない。

何と言つても軍人は國民の中堅だ、別して在郷軍人は決して時代思潮の魔風に捲かれてはならぬ、軍人にして民業に就いて居る所の者は、國防意識の一層適切な把住者であるから、此心を充實發揮すべきである、予曾て民間宣傳の一助ともなれかしと種々の俗曲を轉換利用して、正義の普及を計つた中に、長唄の「蓬萊」といふ曲を用ひて「國防」といふ歌を作つて置いた、長唄の出来る人なら唄へるから、盛にうたつてもらひたい。

國防

(宣揚體)

(古曲)

長唄

蓬萊

二上り「おだやかな、世の色見せて憩ふ間も 合「嫉妬を合はす掛引の、笑顔に包む、とげいばら 合「強くならねば外交も、他のおもちやの笑草、拭ひかねたる國辱は、